

は『妻帯、僕に妻を持つてといふんか』『さうだ男に對する女、人倫の第一だ』『ハ、、、止せよ、過日も黒田が妻の事に就いて、ちよいと漏らした通り、僕ア無妻主義だよ』『いや、あの時の議論は承知してるがね、まづこゝに君をして更に心を勞せしめざる妻があつて、つまり女の君ともいふべきものがあつてさ、眞の伉儷、有形無形ともに寸分の過不及なき妻があつたら、どうする、君だつて殊更に好んで無妻主義を張るんぢやアなからう、ある點から感ずるところあるがため強ひて自己を枉けた議論だらう』『ハ、、、むづかしく打ち込んできたね、細説は兎も角、第一どうして其妻を喰はせるね、僕が境遇で』『そこだ、そこだよ、樂しむべく愛すべく互に扶け合ふべき妻が却つて悲しむべく歎くべく果は怨み合ふべき結果となつて、むしろ獨身の昔を慕ひ妻帯の後を悔うるものは世の中に多いがね、そりやア悉く性格と資格の相反するが故で、始めから伉儷といふことを誤つてるからだ、すでに伉儷とい

ひ夫婦といふ、その間に何の不快あるべき筈なく何の不吉あるべき道理がないよ、もし人間一般に苦痛なるものありとせば、夫婦相倚る時よりも獨身無援の時こそ寧ろ苦痛の多かるべき筈だ、ね、そこで僕が君に勧めるのは、もし君をして無妻主義を抛たしむるに足るべき女があれば妻に持つか、いや必ず持つだらうといふのさ、どうして其妻を喰はせるなンぞア君にも似合はない俗論だ、ぢやアどうして君が生きて居るといはなきやアならん、結局そんな枝葉に互つた机上論は儲置いて、實際どうだね、こりやア僕が及ばすながら友誼上、君の生涯に對し謹んで言ふのだ、敢て一場の理窟を並べるんぢやアないよ』『や、わかつた』『わかつたといふのは持つといふことか』『なるほど持つ、持つよ、持つがね、そもくその妻いづくにある』『ハ、、、例の無妻主義を打破して、持つといふ事さへ聞けば、それで宜いんだ、僕また別に考へるところがあるから』『しかし川上、上田力が持つべき妻だよ、當世に



得たる才なく身を養ふべき力なく家なく地位なく、一切すべて斯の如き僕に相應の妻だよ』  
 『よろしい、萬事心得た、多言に及ばず』『だって君、さう獨り極めに極めて仕舞ッちやア困るよ、むやみに遣ッつけられちやア閉口するぜ、唐突の押附業なンざア斷じて承知しないぞ、なかく、僕の無妻主義を破るに足るべきほどの滑稽じみた馬鹿な女はないからね、もしあれば先方で僕のやうな男を持つもンか、無効だよ』『無効でも何でも宜い、いよく妻帯すると言ッた今の一言が何よりだ、大丈夫、キツと探し出してみせる』『しまッた、早く歸れば宜かッたに、妙な工合で變な事になッたわい』『なに、何が妙なもンか、男として妻を持つのが何故變だ』『もう僕ア歸る』『あ、歸ッても宜い、今の一言たしかに聞いた以上は』『いよ／＼いけない、どうも甚だ宜しくない、殊ど困ッたな』『ハ、ハ、ハ、ハ、お清でも呼ンで助太刀させようかね』『いやはや、どうしてこんなところへ彼女に出られて堪るもンか、それこそ失敗また失敗、うかくすると勢ひに乗じて僕の獅子ッ鼻へ嚙りつくかも知れないよ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

『しかし君、彼女は妙な女だぜ、君に對ッちやア目の敵のやうに咬み付くがね、蔭ぢやア君の爲人に心服して神の如く思ッてるよ、上田さんのやうな立派な氣心を持つてる方は千人萬人の中に一人もあるまいッて』『馬鹿女、何を吐すか、生意氣に人の批評をするッて、ハ、ハ、ハ、どりや歸らう、歸ッて直ぐ寐るだ』『歸ッて直ぐ寐るにしても君、もしこゝに君を待つもの妻なるものがあると假定せよ』『ハ、ハ、ハ、ハ、今夜ア嫌に僕を酷めるな、自分の妻が強制執行で植半の奢をさせられた敵討かね』『や、出來た、こりやア君にして大出來だ』『え、何とでも言へ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

其六

しめやかなる春の夜ふけて、音なき庭の樹立の奥ふかき一室に、川上の妻女みづから茶菓を



進めながら、例の下女お清に對うて何とやら改りたる言葉の端々、燈火の外に見るものなく聞くものなし、

『ねエ清、和女が當家へ來てから、もう八年になるよ、其間これといふ目に立つた恩も世話もしないに、和女の方からは萬事の深切、陰陽なしに勤めてくれたのみか、第一この妾を身に替へて、女親がないからつて一入の面倒を見てくれたことは、しみなく忘れないよ』『あらまア何で御坐いますねエ、今更、そんな事を仰しやつてさ、妾こそ不束な生來で何一事これといふ御奉公甲斐のないものを、永年の間、御辛抱くださいまして』『いえくさうでないよ、これまで和女の眞實は全く嬉しう思つてるよ、ついでには妾も斯うして、ともかく良人を持つたから、和女もねエ、どうせ、いつまで其まゝで居られるもんぢやアなし、同じ事なり妾等夫婦の目に叶つた人を見立て、及ばずながら萬事の用意もしてさ、姉妹分といふ』

ことだね』『あれ、勿體ない、まア何を仰しやいますんです、奉公人の妾を、姉妹分などごと、いえもう御覽の通りのもんで御坐いますから、割れ鍋に閉ぢ蓋で、其うち何處ぞへ勝手に願け込みますまで、まだこゝ三四年は此まゝ御傍で』『そりやア此方から頼んでも居て欲しいがね、さて女といふものは誰しも嫁期があつて、さうもならないし、また和女ほど長らく神妙に勤めてくれた女を、妾等夫婦が自分の勝手ばかり考へて、いつまで捨て、置いては世間へ對しても濟まないから、是非とも今のうちにね、しかも少々その心配があるんだよ、良人とも相談して置いた人が』『おや、それほどまで、この清を、何とも御禮の申し上げやうが御坐いませんこつて、あつく、うけますが』『厚く受けるなら、和女、承知だね、勿論まだ先方の人に打明けて確認めたといふぢやアないがね、まづ妾等夫婦が心から取持てば、大抵、縁談が纏まるだらうと思ふ人だよ、だから和女の方を頭も角、きめて置きたいの、つまり妾は』



和女の掛りで、良人は先方の掛りと、かう極めて手分をしてるんだからね』『いえもう、妾は斯な不容貌で馬鹿で、どこに一事の女らしい取得のないもんで御坐いますから、貰つてやるとさへいふ方なら、まして其上に御主人の御世話で、お鑑定までしていたゞいた以上は』『ちやアいよく承知しておくれだね、やれよくそれで安心した、和女の身が片付けば妾の義理も一事は濟んだといふもんだよ、大丈夫、キツと和女の氣にも入り爲にもなる人だからね、心配せずに妾等夫婦へ任して置くが宜い、しかし、縁といふものは、いくら傍側から氣を揉んでも、つまり本人同士の心と心とが自然に合つて出来るもんだから、もし萬々一、和女が嫌と思つたら、遠慮なしに言ふが宜いよ、先方だつて其通り、一生涯に一度の大事なこつたもの、どんな都合で、断るかも知れないから、もしさうなれば、また別に見立て、和女の身の事は、どこまでも妾等夫婦で受持つ決心だよ、今、心當りの人と目出たく極つた上は、

良人とも相談して、家の事から世帯道具に至るまで一切すべて引き受ける覺悟だよ、そして以後は親類同様、いく久しく世話もするし、また世話にもならうし、ねエ清、お互に楽しく暮さうぢやアないか』いひつ、其顔を見れば、お清いつしか兩眼に涙を含んで、果は袖に面を包みながら、おいよくと泣き出しぬ、『あ、有難う、御坐います、この御恩は、死んでも』こゝに奉公してより八年以來、いかなる事にも屈託せずして、日夜しきりに笑ひつゞけしお清も、今は嬉しさに餘つて其まゝ泣き伏しぬ、お清やうよく嬉し涙を拭ひながら、進まむとする膝を兩手に押し静めつゝ、いかにも恩に感じて染々と身に徹へたる體、聲まで平生の調子と變りて、『もう妾は、何にも申し上げません、却つて恐れ入りますから、たゞ何分にも、よろしう』『宜いとも、宜いよ、しかし、人の生涯が一夜が極るほどの大切な事を、妾等夫婦が心の勝手で承知して居ても濟まないし、また



和女にも和女の勘考があるだらうから、ねエ清、ちよいと試みに先方を當て、御覽、どうせ當家へ來る人で、よく和女も知ッてる人だよ』『どう致しまして、妾に勘考なぞが御坐いますものか』『いえくさうでない、まさか不意に押し付けられるもンぢやアなし、いづれ斯人だと打明して和女の返答を聞く筈だから、かまはずに言ッて御覽よ、外に誰が聞いてるでなし、妾と和女の間だもの、和女だッて、最初、良人の事に就いて妾に、いろンな事を言ッてさ、さんざ困らせたぢやアないか、ホ、、、』『あらまア、際どいところで敵討を遊ばすよ、しかし妾には、どうしても見當が付きません、お出入の中で肴屋も八百屋も米屋酒屋その外、どこにも、差當ッて獨身が御坐いませんもの』『あれ清、和女、そんなもんだと思ッてるの』『だッて妾が妾ですもの』『さう、それぢやア和女、よほど見當が違ッてるよ、實はね良人のお友達で』『ホ、、、、御戲談を、まアお人の悪いこと』『いえ眞實だよ』『いくら何で

も、そんな筈が御坐いますものか、ものには身分相應の權衡が』『いえくさ眞實だよ、ぢやア打明けて、いふがね、あの、そら、上田さんね』

きくや否、お清おもはず目を丸くして、俄に總身へ電氣を感じしが如く、一種ふしぎの顔色を現しぬ、『おや、清、嫌なの、不承知かね』問へども更に無言、暫時は目を閉ぢ目を開き口を曲げ耳を赤くして、何をか思案に沈める體、『もし不承知なら、今のうちに清、妾へ、そッと言ふが宜い、何も無理に勧める譯ぢやアないから』其まゝ、じツと打守れば、やがて我に返りしが如く、されど差俯いたるまゝ、膝を組み直し聲を潜めて、『無効で御坐いませう』『何故、なぜ無効だよ、逆も無効といふ事が、どうして和女に分るの』『いえ、別段、妾に分るといふことも御坐いませんが、あの上田さんは、なか〜世間普通の方ぢやア御坐いませんもの、まして妾のやうな女を、逆も無効、夢にも貰ッて下さいませんものか、上田さんなら、どうか、



仰しやらずに此ま、取消していたゞきたう御坐います』「ホ、なるほど、さう思ふのも無理はないがね、たしかに上田さんが承知なさるといふ證據、いはゞ其手應へがあるんだよ、上田さんが世間普通の人でない事も、また假令どんな美人でも賢女でも、容易に貫はないといふ事は妾等夫婦が百も二百も合點の上で、たしかに和女なら縁談の纏るといふ呼吸が別にあるんだよ、それとも和女の方で嫌なら、どうも仕方ないがね』「へエ、いかにも不思議で御坐いますね』「今更ら和女、そんな事をいはずに、確乎した返答おしよ、いやか、應か』「どうしても妾には、眞實のやうに思へませんから』「ちやア嫌なんだね』「ド、どう致しまして勿體ない、唯あんまり身分に過ぎますから』「縁だよ、そこが清、縁といふもんだよ』「しかし、今のうち、申し上げて置きますが、もし萬々一、いえ萬々一ちやアない、當然のことツて、どうせ上田さんが、え、穢らはしい下女風情、まして彼女がと、御立腹なさいましたら、其

欠



# 欠

とぞなりぬ、  
乃公なこうこ、に知己ちぎの扶助たすけを得て僅わずかに斯ごとの如し、豈あにそれ小面倒こめんだうなる鼻かアを持つもつの違いあらむやと、  
四角しかくばつて目を剥むき出いだせし上田うへだを前後ぜんご左右さゆうより和やはらけたる川上かはかみが手柄てがら顔がほ、ほつと溜息たのいきついて  
先まづ倉橋くらはしが許もとに駈かけ付け、大願たいがん成就じゆうじゆ、委細ゐさいこれくと語かたれば、さすがの倉橋くらはしも満面まんめんに笑あはを  
含くんで目鼻めはなを一時ときに取崩とりくづしつゝ、さアえらごとちや、用意ようい々々かうしては居をられぬと飛とび上あ  
つて走はせ廻まりつゝ、宛まがら貧乏びんぼう世帯じたいの不意ふいに節期せつき師走しすいの押おし寄せたるが如し、  
上田うへだが萬事ばんじの後見こうけんは川上かはかみの役目やくめ、お清おきよが一切いっさいの引受ひきうけは妻女さいぢよの役目やくめ、夫婦ふうふこゝに一所いっしょ懸命けんめいとな  
つて殆ほとんど狂きやうするばかりに立騒たちさわぎつゝ、果はは意見いけんの衝突しょうとつより騎虎きこの勢いきほひに乗じりて競争きやうせうせむとす  
るほどなりしかば、さしづめ媒介なかくさやく役やくの倉橋くらはしが其間そのあひだに挟はさまれて調和てうわ奔走ほんそう、どツちに附ついて宜よい  
やらあゝ苦くるしい苦くるしいと狼狽らうたいしながら顛ころけ歩いて吹ふき出しぬ、



寒からず暑からず、けに今が四季の最上、人間こゝに情致の好期、春と夏と行かふ空の通路は、かたへ涼しき風や吹くらむ五月の三日いよくその日とぞ定まりぬ、

いはゆる浮世の才子より見れば事に疎く時を知らざるの愚、いはゆる術数の策士より見れば殆ど齒牙にかくべからざるの癡、富貴の目には乞食に等しく、権門の目には瓦礫に等しく、美人は怖れ老幼は駭き、頑たる硬直おのづから世俗に容れられず、寂たる孤立いたづらに市井の嘲弄を招いで、生來こゝに二十八年の間、いまだ曾て自己を枉げ人に屈せざりし一癖一流の上田力が、五尺八寸二十貫目の大兵に生涯一度の恥かしさを忍びながら、香爐獅子に似たる鼻を白め鷹の如き目を細めつゝ、破鐘を撞くが如き聲を潜めて新枕に就くの状いかならむ、鳥羽僧正の名畫も及ばぬ奇とやいふべき、

こゝにまたお清は其姿こそ家鴨に似たれど心は鶴に等しき女、顔面ほつと真正面、南風に逢うたる鉛細工の如く膨れながら、どこやらに得もいはれぬ無量の愛嬌を含んで、をりく自らの滑稽に罪も報いもなき體、さりとして幼少より父母を失ひ同胞もなき他人の手鹽にかゝりて、いつしか浮世に馴れたる世話娘、そのまゝこゝに世話女房となつて男も男、上田が如き男に生涯の契りを籠めて百年の苦樂を共にせむとは、家庫引き廻して年中常綺羅の日髪日化粧に暮さむよりは遙に勝りし幸福女、當年こゝに二十六歳の處女、これをも苔の花とやいふべき、

互の身には斯る運命ありと知らねど、縁を結ぶの神は早くも笑を含んで戯れけむ、汐入村以來こゝに七年の間、顔さへ見れば口を尖らし泡を吹いて諍ひながら、あとは其まゝ毒も怨恨



も残らず消え果て、何とやら憎からぬ年來の心と心、これが上田とお清なればこそ、其も知らず打過ぎ人目の關にも戀とはならで打過ぎしが、今こゝに夫婦となりて思へば何やら流石に恥かしき心地やせむ。

其八

世間の義理、人間の義務、生涯のうちに一度なりとも夫婦の媒せすば死して地獄へ行くとの諺を思へば、夫婦も夫婦、上田の如き男とお清の如き女を取持ち、しかも新に一家の肝煎より世帯道具の末に至るまで引き受けし我々は、死して極樂の中央へ大手うちふつて通るべき筈と、川上倉橋もろとも互に手を拍つて打笑ひぬ。

『しかし川上、今更ら變な事をいふやうだが、あの上田にして、よくまア承知したこつたね、無論、君が説伏の功に與つて大に力ありだがね、彼が天性から割り出してみると實に奇

だ、殆ど妙だね、結果こればかりは古今を通じて人爲の外といふべしだ』『いや、なか／＼容易に承知しなかつたさ、尋常一般の議論的勸誘では逆も無効だがね、いつか向島の花見から僕の妻を送つて来た時、ちよいと伏線を設けて置いて、爾來しきりに策をめぐらし機を窺ひ、こゝぞと思ふ時、俄然不意撃を喰はしたから流石の先生いさゝか狼狽の體で、迅雷の耳を掩ふに違あらざるが如き勢ひで攻め落したのさ、随分と骨が折れたよ、何分あの通りの人物だからね』『だらう、容易に承知する筈はないさ、かねて持論の無妻主義も當世いはゆる薄志弱行の平凡書生が生嚙りの厭世的に机の上から来たのでなく、實際おのれが肺肝から絞り出して、しかも其持論を生涯履行するに足るべき男だからな、しかし君、どうだ、その上田が君、あの晩の景況は、殆ど人事の裏面に伏せる微妙の消息を傳へて一種いふべからざるの狀を呈したぜ、つまり人間は戀愛的の動物たるを免れんな、到底、女に對する男、男に對す







嫁入荷物中の金玉だぜ』『や眞實だよ、上田が妻としての清、お清が良人としての上田、こめやア實に天下第一品の夫婦だ、古今を通じて得易からざるの伉儷だ、願はくば早く子を産ませて見たいな、上田が妻に對しての言行また一種の奇だらうが、もし彼が子に對するの行爲に至つては更に奇中の奇だらうぜ、時に新夫婦が新枕以來の景況どうだ、今日で四日目、これから不意を襲うて見ようぢやアないか』『いや、よせ、あのまゝ、そつとして置いて、先方から遣つて来るのを待つ方が却つて一興だよ、しかし今ごろは何をしてるだらう、いくら上田だつて少しは様子が變つてるぜ、まさか例の勢ひで、こら家鴨め、やアお清君ともいふまいからね、ハ、、、』『上田ばかりぢやアない、あの清の様子も見たいな、何と言つて呼ぶだらう、もし良人、ちよいと良人や、もし旦那様、ハ、、、、上田が旦那様と來ちやア殆ど滑稽だ、いや事々物々いろんなことを想像すると、いよく以て呵しい夫婦だ、あれでも』

君、永久の間にやア夫婦喧嘩をするだらうね、はッは、、、』

世間普通の夫婦とは頗る變りて萬事に一風一流の男女、まして結婚以來いまだ日も淺ければみだりに襲うて調子を狂はせ不意に訪うて驚かさむは氣の毒なりと、いづれも差控へてその來るを待ちしに、七日目の朝、川上と倉橋が許へ同じ一封の郵便、披きみれば、

新婚旅行なるものをいたし候  
上田 力  
同 きよ子

流石の川上も倉橋も、あつと一時に呆れぬ、さてもく、上田に似合はぬ味をやつたるものかな、彼等夫婦が朝夕の言葉さへ思へば呵しきに、五尺八寸二十貫目の山の如き大男と十七貫



目の立白に似たる大女と、互に手を携へて新婚旅行とは一幅のボンチ畫、そもくいつこへ行きしぞ、まづ東海道筋では鎌倉か江の島か大磯か函根あたりか、東北線では大宮か宇都宮か日光までか、上總下總の方角では九十九里の濱邊か成田か銚子か、よもや潮來出島の洒落は知るまじ、いづれ遠くて五十里内外、近くば二十里前後の證據には、あはれ第一の持つべきものを持たざる筈と思ひの外、立出でしより十日目の便郵は何ぞ豈らむ出雲國より、

拜啓、小生は甚だ馬鹿けたるやうに思ひ候へども、愚妻しきりに懇望いたし候故、出雲の大社、世俗いはゆる月下氷神さまへ御禮參詣をいたし候  
萬事の用意は愚妻が臍くり金こゝに數十圓あり、御安心くださるべく候、以上、

川上と倉橋の兩人いよく呆れ返りて果は恐れ入り奉りぬ、あゝ上田なるかな、上田かな、上田にあらずんば誰か斯おもしろさを解せむ、誰かこの藝を演じ得べき、茫として自然の滑稽、漠として自然の情致、萬人一様の鎌倉江の島さては日光成田と思ひつゝ、よもや潮來出島の洒落を知るまじと嘲りしに、おもひきや出雲の大社より遠路わざくのろけまじりの一書に接せむとは、油斷大敵、歸京の後も我等うかく寄り付かば、倒まに冷されて遁路を失ふべしと、いづれも今更に驚いて打笑ひぬ、

其九

川上と倉橋が引き受けての友誼、借屋ながら本所の横網町に見苦しからぬ新築の二階屋、二階の八疊よりは隅田川を見渡して、階下は六疊二室に四疊半、三疊に續きし臺所は板敷もろとも二坪の取合はせ、縁日仕入の植込なれど青葉しけれ庭もあり、裏口の木戸を開けば井戸



も手の届く邊にありて、道路に對へる半窓の體裁、入口の格子も履脱石おのづから見え透き  
 て、當時東京の家屋相場よりいへば下女一人に食客の二人ぐらゐるあつても差支なき住居、せ  
 まき浮世の俗眼よりは本妻の角を恐れて妾を置くに足るべき家とも見るべし、  
 こゝに上田が妻を迎へしか、お清が良人を迎へしか、家も道具も一時に新調せしところへ、  
 良人も妻も一時に入り込みしかば、これぞ全く相に逢ふ相生の松の翠色や相持の相世帯、嫁  
 入か婿入か其間の差別さらに分らぬところが却つて我等夫婦の得意とぞ誇りぬ、  
 出雲の神社より立歸りし後は、さてこそ川上も倉橋も恐れて近寄り得ざるほどの睦しさ、し  
 かも新世帯に夫婦たゞ二人の氣樂さは、餘所の見る目にさへ餘りて羨まれぬ、  
 大家の落魄れたる妻にあらず嬢様の貧乏せしにもあらで、廚の政事は八年間の修行を得たる  
 業、まして二人差對ひの小粒身代に何の造作かあるべき、ちよこくと戯るゝが如く、

て濟まし込む體、かゝる境涯にはなくて叶はぬ働き女房に、良人はまた外貌にも似  
 汐入村以來の自炊に馴れたる手並あつて、しかも一切萬事に無頓著の簡略單純、寢る  
 起きるにも妻の手を待たねば、夫婦もろとも退屈して主人なき家の留守番に來れるが如し、

『ねエおい、おい、おい』『はい、はい』何ですよ、今こゝ少しで良人の襦袢が縫ひ上るとこ  
 ろですから、勝手をいふやうですが御用なら其處から仰しやいませ』『いや、外でもないがね、  
 何だか腹が減つて來たよ』『ホ、ホ、ホ、小兒のやうに何ですな、お腹が減つたなんて、お  
 菓子も何もありませんよ』『飯だ、飯だ、飯だ』『お飯、いつの御飯です、全體、何時だ  
 と思つて居なさるの、晝からの二時やうく過ぎたばかりですよ』『何時でも構はない、腹が  
 減つたから飯を食ふ』『あらまあ戲事ぢやアない、しかも今日の晝御飯は常より遅くなつて、



一時ごろでしたらう、それに良人また御飯を、ホ、ホ、ホ、」何が呵しい、ある飯が食ひたくなつて食ふといふんだ、ありもしない鯛や鰻を今すぐに食ふといふんぢやアない、さア食はう、今すぐに食ふぞ』あれ、大きな聲をしてさ、棟続きでなくつても隣屋とは板壁一重ですよ良人、みつともない、小さな聲で仰しやい』さう理窟を並べずに早く出してくれよ、全體この乃公も數年來の自炊して來たものだから、飯ぐらゐる和女に頼まなくつて宜いがね、臺所の道具一個ちよいと觸つても喧しい細君だから、かくの如く手を束ねて哀訴歎願に及ぶのさ』それで宜いんです、女房のあるかぎり男といふものは臺所の道具なぞに觸るもんぢやアありませんから』ぢやア早く出してくれ』ですから出しますさ、今すぐに出しますがね、毒ですよ、さう無法に召上ると、それよりか今すこし堪忍なさい、夕御飯を早めますから、かも今日はね、大變な御馳走がありますのよ、良人の知らない間に、ちやアンと拵

ツて御坐います』ふむん、乃公の知らない間に、はてな、いくら祕密に製造しても、この獅子ッ鼻に匂ふ筈だが』いえく、養たもんでないから匂はないんです』養物でない、何だらう、さう聞くと乃公いよく腹が減つて來た、どうだ、夕飯特別の練上策』それでは斯うなさい、その御馳走とね、御酒を一本つけてあげますから、御飯を廢止にして』や、酒もあるのか、いつの間に酒を買つた』先刻、ちよいと横町の八百屋まで買物に行きましたらう、そら其時、肴屋で、鮪のおさしみ一人前、ついでに酒屋で三合、今夜ゆつくり上げようと思つて居ましたの、今日で肴も御酒も三日あけませんから』なるほど、うツかりして居たが、三日目毎に酒と肴がつくんだな、さても家憲の嚴なるかな、以て細君の用意緻密を知る』なに、さうも限りませンの、時と場合に依つて其日の都合次第にしますがね、まづ斯うして置かないと家の爲になりませんから、萬事しばらく小泉町の二階借を思ひ出して御辛抱なさい』



『や、心得た、小泉町の二階ちやア頗る寂寥なもんだつたぜ、まづ第一の馳走が金山寺味噌、やたら漬、くさやの乾魚、或は鹽ツからい雜魚の佃煮、乃至また焼芋に生醬油ぶツかけた奴、つまり手数の入らない價の廉い腐らないといふ三拍子うち揃つたものを案じ出すんだからね、ハ、ハ、ハ、面倒臭い時は土鍋のまま、半熟の飯の上へ薬研堀の七味蕃椒を振り掛けて猶その上から沸湯を注いで一時に搔ツ込むのさ』『ホ、ハ、ハ、ハ、まア無精なこと、全體どんな味かありませんの』『味、そもく味なんぞあるもんかね、飯の熱いのと蕃椒の辛いのが咽喉へ染み渡つて沸湯の湯氣が一種ふんと鼻を貫く鹽梅、いやはや何とも彼ともいふべからざるの變味だね、しかし、こりやア冬にかぎる、いかな寒中でも汗が出て一時を凌ぐに足るからな、時に取ッては頗る妙だよ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

上田が性と身には別けて不適當の品ながら、家と妻あるからは無くて叶はぬ長火鉢、これを

起點として一家調度の配置を定むるといへば、固より亭主關白の位その前に坐して背後の柱に倚りながら、おもはぬ馳走の酒肴を置き並べつ、自己が世界に自己が杯をあけての味は殊更の甘露々々、さすがに嫌な心持にもあらねば、上田先生おもはず笑を含んで四邊を見廻しながら、『實に面白いもんだね、呵しいもんだね、わづかに膝を容る、ばかりでも、斯うして兎も角、家といふものを構へ、また女に妻といふ名を付してみると、なるほど、聊か妙だわい』『おや何が妙ですの』『何がッて、妙ぢやアないか、つまらない斯んな肴でも不意に現れて来るし、また半ほどでも酒の用意が出来てあつたりさ』『ホ、ハ、ハ、ハ、不意に現れたの、出来てあるのと、何だか自然に湧いて来たやうですが、やはり皆お金の端ですよ』『いや、わかッてる、その邊は能く承知してるがね、これが獨身で居ると今この境遇より多少の餘地があつても斯うは行かない、この藝が出来ないからね』『そこです、人といふものは家が大事、』



大きくツても金持の潰れるのは忽然アツといふ間ですが、小さくツても田舎の農家は急に  
 仆れませんからね』『名言、正に然りだ、をりく和女は乃公よりも氣の利いた事をいふよ、  
 何日だツたか、そら兩國橋の上で夜更の景を眺めて、こゝに月のないのが一入だと、いや感  
 心したね、川開きの花火と月と雪とで昔から名高い兩國橋をむしろ闇夜が寂然した情を含ん  
 で宜いたア面白かった、萬事、人間は獨力獨行の自信と主義がなくツちやア無効だ、とかく  
 今の俗物どもは自己の持論もなく徒らに世の中を附和雷同するから癢に觸る』『ホ、  
 兩國橋に月はいらないというたのが、そんなに宜いんですかね、しかし良人、あの時の事  
 を皆いちく覺えて在らツしやいますかね』『あの時の事とは、どういふことだ』『いッそ妾  
 と貴方と夫婦になりませうかと、其時に良人、なんと仰しやツた』『ハ、  
 馬鹿、つまり  
 ない事をいふもんでない、もう一切、過ぎ去った事は互に言ひツこなしだぞ、宜いか』『ホ、

ホ、過ぎ去った事をいひ出すと悉皆、良人が悪いもんだから少々きまりが宜しくないので  
 せう、自分の氣が咎めて』『何、乃公が悪いもンか、さういふ意味でない、過去を語るものは  
 將來に於ける愚者なりといふ諺があるからだ』『何故また過ぎた事をいふのは可けないンで  
 す』『いけない、何だかいけない、いふことならンぞ馬鹿、全體つまらないから馬鹿』『あれ  
 馬鹿々々ツて、しかし妙なものですことね、かうして夫婦になると、同じコツても、どツか  
 優しいやうですね、あれほど口癖に仰しやツた家鴨が出ませんもの』『ば、馬鹿、過去は一  
 切無用だ、いふことならンといふに馬鹿女』『も一度お清君が聞きたいことね、何だか思ひ出  
 して懐しい氣がしますもの』『や、こいつ女』『それ、そろく元の口癖が出かゝりましたね』  
 『え、酒でも酌しろ馬鹿』『しかし良人、夫婦の時は假令なンと言ツても噛み付いても宜し  
 いが、もし人でも來てる時、嫌ですよ、第一に良人が安く見られますからね』『え、馬鹿、そ



れくらゐの事は百も承知してゐるわい馬鹿』『おやく／＼深川の豊年で馬鹿の安賣、くづし賣』  
 『えッもう無言だぞ』『やれ／＼まづこれで安心しました、いくら戯談でも隣屋などへ聞かれ  
 て實際の夫婦喧嘩とでも思はれちやア外聞が悪い、第一それに良人の聲が人並すぐれて大き  
 いもんだから、知らない人は驚きますよ』『地聲だ、元來だから仕方がない馬鹿』『おやまた』  
 『ハ、ハ、ハ、ハ、今の馬鹿は、たつた一つ残つた賣り仕舞の馬鹿だよ』『ホ、ハ、ハ、ハ、良人に  
 しては少々出来すぎた洒落ですよ』『洒落、洒落なんぞ大俗凡下の猪鼻助がいふこつた』『お  
 や御免遊ばせ』

其十

上と下と隔ての天井板わづかに一枚、しかも同じ家に住む夫婦ながら、けふ一日は天地の相  
 違に等しき別世界、あかの他人となつて物いふべからず顔みるべからず、茶も湯も入らぬ酒  
 は猶更ら禁物と、たゞ鹽氣の握飯六合分を携へつゝ、わが書齋とせる二階の八疊へ閉ぢ籠り  
 し良人の體、さては一癖殿、そろ／＼呵しな事が始まつたりと思へども、お清この日は洗濯  
 ものに追はれて忙しければ、つい晝ごろまで其まゝに打捨て置きしが、あまり音なく聲なき  
 不思議さに眉を擡めつゝ、そつと二階へ忍びゆき襖の隙間より差覗けば、上田先生こゝに沈  
 思黙考の體、さながら面壁の達磨に等しく床の間に對うて端坐し、肩を怒らし肱を張つて更  
 に動かす、唯をり／＼傍らに置ける握飯を掴んで、むしやく／＼と喰ひぬ、  
 しかも良人が對へる床の間には、新婚の祝儀として倉橋より贈られたる蓬萊の一軸ありし筈  
 なるに、今日は巻き藏めて片隅に立てかけつゝ、あらたに自筆と覺しき唐紙一枚の大文字、  
 ところ／＼筆端を跳ね飛ばして踊るが如く、墨色まツくろに流れて露の滴るが如し、  
 これまでの婢清なるものならば恐れて其まゝに打過すべきも、今は連れ添ふ妻としてのお清、



固より吐らるゝを承知の覺悟、すつと襖をあけて入れば、上田先生おもはず振り向いて、心に怒らねど目に角たてながら、『おい、何の用だ、なんの用で来た、たとひ用があつても、けふ一日は逢はないと言つて置いたに馬鹿め』『ホ、、、、來たつて宜いちやアありませんか、何も良人、知らない餘所のもんが這入つたんぢやアなしね』『いけない、今日は餘所の人間も同じこつた、上と下との別世界、あかの他人と言つたのを忘れたか、妻として良人の命に従はざるは子として親に背くと一般、けしからんこつた』『悪けりやアあやまりますから、御免下さいですが良人、全體、そこで何を』『何でも宜い、そもく卿の與り知るところにあらすだ、黙つて引退れ、この握り飯さへありやア今日中、汝に用はないんだ』『あらまア、なさけないこと、妾は握り飯だけの價値よりないんですかねエ』『ハ、、、時に取ツちやア握飯より價値もあるがね、まづ今日のところ、そんなもんだから諦めて早く階下へ降りろ』『ホ

欠



# 欠

な、そんな事を仰しやると、妾が堪りませんわ、これが世間なみくに飛び勝れた女でもあることか、妾のやうなもんを持つたがため、却つて良人に餘計な苦勞を『や、愚癡、その愚癡を誰に聞けといふんだ、今日この二階へ禁じたのも、それがためだ、馬鹿め、料理屋の勘定は自家の總菜より高いもんだ、今更ら役にも立たない、つまらない無用の駄辯を止して早く降りろ、しかし安心しろよ、當世の天下いづれも才子と才子とが日夜競争の擱み合だから、却つて愚者が其間に得べき安全の地は多いぞ、車を飛ばして駆け集る表門の參詣道より裏門の田甫道を錢なしで歩く方が却つて怪我なしだ、もし神に靈あらば其靈驗また却つて著しかるべき筈だ、わかッたか』『は、はい、わかりました』『さ、わかッたら安心して降りろ、いはゆる女の取越苦勞もしくば愚癡心配など、いふものは、乃公よりも氣の利いた男を持つた女のすることだ』『はい』



我みづから我を責むるの文に對うて、これを浮世の敵としながら、朝の七時ごろより頻りに苦戦せしが、その日の午後五時ごろ、やうく敵の中堅を突き破つて凱歌をあげし勢ひに、をりしも夕餐の茶漬かッ込むや否、飄然として家を立出でつゝ川上が許を訪ひぬ、生憎、川上は不在なれど、やがて歸るべき筈といふ、さらば待たむとて心易く馴れたるまゝ、かねての一室に打通れば、妻女たちいで、良人の名代、さまざまに待遇ながら、「ねエ上田さん、此ころは貴方、何だか以前のやうに來て下さらないことね」だつて別に用がないからです』『空言を仰しやい、用のあるなしは兎も角、外に何か理由があるんでせう、ちよいと人には言はれない』理由、外に何の理由が』『あらお恍惚なさるよ、ホ、ホ、ホ、貴方にも似合はない、しかしそれが當然です、今までの上田さんぢやアなし、さう無法やたらに、ほかほ

か出さないのが情ですもの』『や、怖るべし女の執念、そろく〜と昔の復讐を始めますな、しかし僕は何事に就いても正々堂々、川上と貴女と新婚の當時だつて今のやうに持つて廻つた陰險な言で攻め寄せなかつた筈だが』『おや、執念ぶかいの陰險だのと、何も貴方、そんな事で申すんぢやア御座いません、たゞ今までのやうに、お手軽く出られないのが當然だといふのですよ、ホ、ホ、ホ、しかし上田さん、あんまり當然が過ぎますと、却つていけませんよ、つい、そら我まゝを仕合つてね、まさか癡話喧嘩もなさりますまいが』『こりやアいよく〜けしからん、自分がするからつて他人を』『いえ〜どんな方でも貴方、こればかりは同じこと、しかし月下氷神様の本家本元へ新婚旅行なさるほどですから、貴方ばかりは別かも知れません』『ハッハ、ハ、ハ、實に愚だ、馬鹿々々しい、ありやア僕の意見でない』『貴方の御意見でないところが猶更ら、實に愚で馬鹿々々しい取るにも足らない女のいふことを聞き入れ



て、わざわざあんな不便な土地まで、眞實、あの時お手紙を拜見して、しみんゝ羨みましたよ、貴方のやうな優しい方を良人に持った女は幸福の重疊だと思つて、ですから其お手紙は今でも妾が頂戴して大切に藏つて御坐いますの、もし良人が無理でも言ひ出した時の用意、これを御覽なさいと差出す心算で、ホ、、、』『やア、いろんな方面から僕を酷めにか、つたな、よろしい、いくらでも酷めなさい、そのかはり覺悟でせうな、近日のうち不意に新手を出して戦はせますからね』『おやまあ上田さん、新手とは全體、どなたのことつてすの』『ハハ、僕に代つて身命を抛たむとするもの天下また外にありませんか』『さアその外にないといふ人の名を、お聞き申したいんですよ』『あれです』『あれとは』『あいつの事です』『あいつの事とは』『むかしは當家の婢、清なるもの、今は上田が最愛可憐の妻、清子なるものです、彼れ常に僕を慰めていふ、良人は妾の生命、妾は良人の生命、およそ世の中に夫婦も多いが、

その九分までは悉く浮世の義理と一時の感情と戀と慾とで形式的に出来たもの、しかし良人と妾とは人間二個で一個の生命を保つてる中ですから、人爲の作用に訴ふべき義理も感情も戀も慾もなく、つまり春に逢うて花の咲くが如く秋こゝに來りて實を結ぶが如く、全く自然の結果だと、かう言つて居ります、ハ、、、』『もうく上田さん何卒その邊で御免あそばせ、いよく降参いたしました、この上に新手を出されては逆も叶ひませんから』『いや、是非とも出します、元來この僕は御存じの通り武骨調辯で、實際の十分一も言ひ得ませんからね』『あら、それで貴方まだ十分に足りませんの』『然り、もしその實を知らむと欲せば、どうです、一夜、速記者を備うて宿泊がけで來らしちやア、その自然の眞實より湧き出づる一語一句の濃かにして深く人情の微妙幽玄に達するや、實に愛の神と神との私語低聲を聴くに等しいくらものモンですぜ、ハ、、、』『恐れ入りました、もう此後は上田さん貴方に對つ



て一切、何にも申しませんが、どうか御慈悲に、お助け下さいまし、おや、玄關へ著いた今の輪響は良人で御坐いますよ、ホ、、、』『ホ、、、』といふ其、その笑ひ聲は細君、そもそも何がためです』

平生は兎も角、今夜は一身上の決心を齎して来れりといふ上田が言葉に、川上さらばとて奥まりたる別室に伴ひつゝ、用事あらば手を鳴らすべき筈に人を遠ざけながら、わづかに葡萄酒と林檎を置いて語りぬ、しかも主客ともに何とやら改りたる體、

『由來の恩義は上田が生を終るまで決して忘るゝところでないが、さて今、言つた通りの決心だから、今日かぎり、謹んで將來の恩義を辭するよ、以後一切、うっちゃやつて置いてくれ、とかく人といふもなア薄弱の天生、空しく恩に狎れ易くつて、いつしか其恩の理を没却する

の恐れがある。つまり恩なるものは其數の多少と其度の輕重とに關せず生涯感謝すべき筈だが、恩の性質は人の生涯を通じて授受すべきものでないね、もし生涯を通じて授受すれば、施すものは其人を愛するのあまり其人を物質的の無用視する所以、受くるものは其人を仰ぐのあまり其人を無盡藏の阿堵物とする所以、むしろ乾燥無味となつて殆ど其間に何の功もないから、こいつア何か機に乗じて實行を止めるのが却つて雙方の爲だらうと思ふ、即ち僕の如き當世に反いたる魯鈍の雜物は、恰も熱帶國の土人が野生の菓實を取つて喰ふと一般、際限なき其恩に生を託して夢の如く自然に死を待つゝの狀、いかにも醜汚の極だ、とは思ひながら奈何せん、やはり茲が魯鈍の我で、今までの優柔不斷、禮義的に辭する工夫も出来なかつたのさ、しかし今日、いやしくも妻を持ち家を構へしは天その魯鈍に鞭たしむるの時、あはして君が恩を辭すべきの時だらうと思ふのだ、なほ將來の叱咤教正を待つことは多々ますま



す糞ふところだがね、生活の點に於ては一切さらに断じて僕を捨て、もらひたい』  
川上おもはず兩眼を閉ぢて死せるが如く默然たりしが、しづかに組める腕を解いて重く膝上に置きながら、その膝を進めて上田の面體じつと見詰めぬ、

『いや、よくわかつた、君の君たる所正に斯くあるべきこつた、汐入村以來、今日に至るまでの君と、今日より將來に於ける君とを混同する川上でないから、その間に一言の挿むべき餘地なし、わかつた、わかつた、しかし君、これから何をする心算だ、執るところの業は何だ、なるほど、失敬ながら世間の俗眼は君を以て才俊機敏の人とはいふまい、いふまいがね、僕は獨り君を以て寧ろ世間の才子よりも大體の結果に機敏の才と果斷の力を備へて居る人と信ずる、だから君が將來の生活上に就いては更に一點の危むところもないがね、また狷介みづから固持して動もすれば浮世通俗の反比例に出づるの點は君が長所にして君が短所

だ、ところで通俗の浮世なるものは人の長所を捨て、人の短所を捉へるものだから、願はくば其方針を聞きたいね、及ばずながら、また愚見を呈して参考の一端に供する事もあるからね』『いや、そこだよ、かくの如き僕だから、固より官吏になれる筈なし、商賣は猶更ら以ての事、その他の會社事業に就いても、節を折り意を枉けて日夜孜孜々々勉強したところで先づ受附ぐらるだ、さらばとて自ら無職業といへる一種の業を有して世間を渡るの技倆は勿論、詩才に富める文筆の徒でなし舌鋒を用ゐるべき辯説の輩でなし、文明的専門の學術なし規則的組織の頭腦なし圓轉滑脱の才なし術數權謀の策なし、しかも明りに人の驅使に甘んずる能はず、無論、人を制御するの支配力を有せず、またその間に俯仰して一種の寄生蟲たる能はず、列舉し來れば唯これ二十貫目の大男、もし世間普通に超ゆるものありとせば腕力の一あるのみだ、しかし今日の壯士となるまでに墮落し得ず、かの土方人足となつて衣食するも聊か早し、



をもく、上田力が當世に對うて何の業を取らむか、まづ君、こゝろみに撰擇してみてくれ」  
 「ハ、さう自分から並べ立て、不意に問はれちやア困るよ、しかも人間生涯の大事だもの」「人間生涯の大事といへば大事だがね、今こゝでいふのは單に生活問題だ、それも我々夫婦が飢餓に迫るといふ淺薄の點から割り出した衣食住で、つまり世間普通の暖衣飽食すら羨まざるの程度だから、まづ月に三十圓より四五圓に至るの間に於て、上田が分相應の職業は如何だ、もし今さし當つて君の思慮中に浮かばずんば、乞ふ、この魯鈍なる無用の一癡漢をして十日間に起すの業を見てくれ、これ徒らに高恩の友へ對つて自己が工夫を誇るの意にあらず、實のところ、今こゝで明言せざるに於て大に其職業の起因あるんだからな、天意の廣大にして慈愛の深き、僕の如き愚物すら、奮つて起せば茲に安然たる衣食の道を賜ふ、ハ、ハ、ハ、」  
 『なアに僕の胸中に浮ばない事もないがね、あまり君が謙遜して、かたつばしか

ら列擧し過ぎたから、ちよいと返答に窮するのさ、今、列擧した中にでも、立派に君が遣れる事は澤山ある筈だ、しかし十日間に奮起すべき名案を謹んで拜見しよう、ついでには其業の何たるを問はず、將來、君が世に對する一切すべての主義方針を近き一例の下に豫言的の批評すれば、まづ、かの黒田健次と正反對だらうと思ふ、彼は智なるが如くにして其結果は愚に等しく、君は愚なるが如くにして其結果は智に等しく、彼の才は多方面にして事々物々の一端一角に迸り、君の才は集注的にして事物の大體に功を奏するだらう、彼の愛嬌には毒言を含み、君の毒言には愛嬌を含む、彼は一見、熱血なるに似て其實は冷血、君は一見、冷血なるに似て其實は熱血、彼は多辯に失し、君は無言に攫取す、彼の滑稽は爲にするとところあり、君の滑稽は自然に洒々たるどころあり、彼は好んで精悍に誇るの徒、君は秘して度量に容るゝの人、彼は常に疾走馳驅して躓き、君は常に悠々寛歩して達す、その他すべての性行



一切に於ても實に奇だ、兩々相對して殆ど黑白の好一對、僕も倉橋も君等二人を對照して其間に得たるところ随分あるからね、過日も倉橋が其正反對の點を三十七個所ばかり列擧して來たが、眞實、ふしぎだよ』や、そりやア聊か皮相の見たるを免れずだ、しかも今こゝで僕が聞くに忍びず語るに忍びない點もあるがね、つまり黒田は君がいふほどの男でないよ、ありやア不幸にして浮世の繼子になつたのだ、また僕なンざア幸ひにして君の如き益友の下に自己が天生の愚を守つて今日に至りしもの、さして深い過誤のなかつたといふだけのことさ、むしろ無能力を表白すると一般、いざ浮世の舞臺に踏み出した以上は君、どうなるか知れるもんかね、ハ、ハ、ハ、ハ、

其十一

人も人によりけり、世も世なりけり、そもく五百年前の山中に功名利達の念を斷つて遁れ

しが如き上田が、日夜もろくの罪惡をもて市街をなせるかと疑ふばかりなる今日の社會に對うて、十日間に獨立自營の道を求めむとする工夫、果して何の業ぞ、刎頸の知己たる川上倉橋にも語らず、友白髪まで連れ添ふべき妻のお清にも打明さで、おのれ一人こゝに何をか人しれぬ浮世の間道を見付け出せし體、おもはず片頬に微笑を含んで悠悠また寛々、されど十日間に起すべき我職業に就いては、尠くとも一週間この東京全市をめぐりて具に觀察すべき必要ありと、妻に命じて六合の握り飯を二包の竹の皮に用意させ、別に十錢銀貨一枚と手帳鉛筆を携へながら、衣服のみは今の境涯とて流石に垢もなく破綻もなければ、例の帽子、例のステッキ、例の下駄、夜の明くるを待って家を飛び出し、夜に入つて後いづこよりか歸り來りぬ、

出づるに語らず、歸るに語らず、出入ともに無言のまゝの終日、のそくと山の如き大兵い



づこを彷徨うて何をかする、殆ど一個の怪物

四日目の午後二時ごろ、すでに用意の握飯六合分を一粒も餘さず食ひ込んだり、十錢の銀貨一枚を小賣酒屋の店頭に投じて茶の代りにコップの立飲みは濟んだり、いざや夜に入るまで意氣さらに新なる鐵脚の我世界ぞと、上田力こゝに悠々として下谷の佐竹が原より和泉橋に出でむとする折しも、第二醫院の此方を辻車に乗りながら、しかもその車の輪さへ數へ得べきほど緩慢なる車上に、瘦せ衰へたる病人は正しく黒田健次、もしやと歩を停め眼を睜れば、いよ／＼黒田、さてはと上田そのまゝ走せ寄つて聲をかけぬ、「おい黒田、黒田」  
車上の健次おもはず驚いて振り返るや否、ぱつと忽ち兩眼を閉ぢつゝ、宛ら小兒が物を偷みしが如く、しかも胸に拵れたる兩手を當て、羞俯さぬ、

「おい黒田、どうした、どこへ往つた」上田か、あゝ上田、僕は、僕ア君に對して、さらに言ふべき言葉はない、コ、これを見てくれ、この兩眼の涙は君に對つて何事か、カ、語つてゐるから」「え、往來だ、つまらない事をいふな、しかし病中、獨りで何處へ往つた」「そのの、第二醫院まで、あゝ上田か、上田、君は實に、上田」「上田々々だつて何のこつた、いくら病氣たアいへ君にしちやア聊か衰へ過ぎたぞ」「衰へるところか、もはや僕ア生きたる屍だ」「馬鹿、なゝ何を馬鹿な、しつかりしろ」「いや、もう無効だ、去月の上旬、君の賜物に依つて一度は全快しかつたがね、また忽然この通り」「それほど弱つて居ながら、獨りで病院へ、あの妻は附いて來ないのか」「うゝ上田、その、その妻はね、僕を振り捨て、去つたよ」「何、あの貞婦が、あれほどの妻が病中の貴様を捨て、去つたア、全體ド、どうして、いつ」「先月の二十七日、僕を捨て、現世を去つた」「えッ、シ、死んだのか」「いや死んだのぢ



やアない、この僕が多年の間、なぶり殺し、なぶり殺しに殺したのだッ』『む、ウ』

其十二

出るにも入るにも言はず語らで、何を目的に何處を徘徊くやら、たゞ十日間に夫婦生涯安樂の種を拾はむとて、朝は東天より飛び出し夜に入りて後やうく歸るべき筈の良人が、今日にかぎりて午後三時ごろ、さては黄金の塊物でも掘り出して来たかと思ひの外、貧乏神の本体に等しく瘦せ衰へたる一個の病人を辻車に乗せつゝ、しかも其身は車後より附き隨うて歸り來し體に、お清アツと呆れて驚きぬ、

上田しづかに車上の黒田を抱きおろして、二階の八疊へ背負ひ上げつゝ、押入より引き摺り出せし夜具を壁に差寄せながら其上に坐せしめ、また階下に降り來りて妻に對ひ、『おい、かねて聞いてるだらう、あれが、そら黒田といつてね、川上や乃公と一つ鍋を喰ひ合つた友達

さ、しかし少々仔細あつて其後、打絶えて居たのが今日、ふと途中で逢つたのよ、ところが、あの通りの病人で、しかも多年の苦勞を仕合つた鼻アに死なれて、殆ど慘憺の極に陥つてる様子だから、ともかく連れて歸つたのだ、時に何か、あつたかい毒にならない病人の食へさうなもんを考へて、出してやつてもらえないか』『おや、さうですか、かねぐお噂に聞いて居た、あれが黒田さん』『汐入村へ始めて汝が尋ねて來た頃は、ちやうど彼奴が出奔した時で、爾來こゝに七年、あゝ水の流れと人の行末たア、よく言つたことだ、ねエ』『ちやア兎も角、何を上げませう』『何ツて、乃公に分るもんか、汝が考へて拵へるさ』『それでは、鶏卵の半熟、どうですか』『む、さうだ、それく』

また二階の八疊へ上り來て、今更ながら黒田の面體じつと見れば、きよろくくと間斷なく運轉して一種の物凄き光りを帯びし大目玉も、今は睡れる如く茫として半眼に開きつゝ、し



かも腫子しづかに打沈んで光輝を失ひ、額際の青筋あらはれ頬骨高く脣端の色さへ褪め果てて、小兵ながら骨格皮肉の大丈夫なりし昔の面影どこへやら、瘦せ衰へたる手足は枯木の如く纒に身を支へて、をりく苦し氣の息を漏らしぬ。

『おい黒田、全體、醫者ア何と言ッてる』『まづ肋膜炎、といふことだ』『む、肋膜炎、そいつア猶更、大切に養生しなけりや不可ン、ところでね、先刻は途中だつたから、よくも聞かないが、實に氣の毒なは君の妻だ、悲惨の極、あの貞婦が、委細を聞くに忍びないが、あの可憐なる妻が、どういふ病氣で、さう俄に死んだのだ』『上田、わづか二三度より逢つた事のない君が、委しく聞くに忍びないといふほどの妻がことを、現在の僕が、どうして委細に語れるもんかね、纖弱く見えても大體が丈夫の性來、ふと風の心地ぐらるに軽く思ッて居たのが、つまり僕に取ッて生涯の忘るべからざる遺憾、また妻が油斷大敵、なるほど風の心地

で一夜寢込んでもね上田、もう起きられないのが當然の女だつたよ、汐入村を出奔以來こゝに七年といふもの、何たる不幸ぞ、可哀さうに君、僕のやうな悪縁に取ッつかれて、今日といふ今日さらに一日の娯樂どころか氣の休まる時もなく、長の星霜、苦勞も苦勞、實に上田、ありやア女といふよりも、むしろ人生慘憺の涙が凝結して、かりに女の容貌を形づくつて居つたのだね、つい當座の事と思つた感冒が、いよく死病と悟ッて落ち入る前日、その夜の二時か三時ごろだつたらう、この瘦せ枯れた僕の手首を、しツかりと掴んでね、コ、かう言つたよ、たとひ妾は今こゝで死んでも更に何の、何の遺憾どころか、實は心で泣いて喜んで居る、何故といへば、いくら浮世といふものが残酷からつて、これぢやアあんまり残酷さに念が入り過ぎてから、つまり妾の生命で、良人の生命を買ひ取るのかも知れない、どう考へても、夫婦もろとも落魄やうも落魄やう、こゝまで落魄れて、七年間あれほどの艱難苦勞



が水の泡となるばかりか、この乞食小屋に等しい床板の上で、一時に枕を並べて一時に死ぬといふ筈がないから、しかし、たゞ一事、なさけない、迷ひの種、残念なは良人の身上、どうか早く全快して、も一度、世に出る姿を見て死にたい、もし妾が死んだら、さぞ困るだらう、その病氣を介抱するものがないからって、上田、サ、察してくれ、先刻も途中で言つた通り、妻は死んだのちやアない、全く妻がために悪魔外道たる僕が、七年間、なぶり殺しに殺して仕舞つたのだ』『えッ黒田、もう止せ、言ふな、いふに及ばん』『いや、まだ一事、君にいふことがある、いよく落ち入る曉方にね、たつた一枚の煎餅蒲團を身に纏うて、わづかに首をあけながら、上田、君、君のことを言つたぜ、もし他日、あの上田さんに逢つたら、妾が死際まで、泣いて喜んで居つたと、くれぐれ傳言へてくれつて上田、おい上田』

上田力きくや否、兩眼より溢れいづる男泣きの涙を拭ひも得せず、達磨に似たる五體を小兒

の如く震はして總齒を咬ひ占めながら、猛然として叫びいだせし聲は高からねど吼ゆるに似たり、『黒田、おい黒田、しつかりしろ、假令、たとひ貴様は天下萬人に厭はるゝ、悪人でも奸毒でも、僕は貴様の妻に成り代つて、たしかに介抱してやるぞ、幸ひ、この上田も大に感ずるところあつて將に大俗中へ躍り出でむとする折柄だ、よし引き受けた、死せし妻の一念と、僕が實力の一端とを以て、必ず、きつと再び世に出さう、愚なりと雖も心を決して眼を張りし男兒一呵の下に、うき世が何の絲瓜かあるべき、うぬッ』

愚なるが如く癡なるが如く、茫として世に容れられず、漠として人に知られず、しかも其性の一癖一流を帯びて圭角矯々たるどころ、宛然これ古壯士の風采、また其胸襟の洒々落々として潔白單純の腸より、複雑混亂さらに際涯なき人事俗世の全般を割り出して一氣呵成の



下に遂行せむとするところ、殆ど太古の民に等しく可憐の小兒に等しき此上田力が、百鬼夜  
行の毒刃をもて戦へるが如き今日の社會に對ひつゝ、生涯安樂の道を十日間に探り出さむと  
す、そもく何の業ぞ、

上田力續編

其一

むかしは百鬼夜行の圖を烏羽僧正の繪巻物に見て驚き、今は百鬼畫行の怪を世間いたるところ  
の眼前に見て何の絲瓜とも思はず、むかしは人しれぬ山奥に棲んで、をりく里を荒せし  
窟の山賊も、今は市中の中央に大廈高樓を構へて玄關より乗り出す自動車に全盛を唄はれ、  
鐵砲よりも舌鋒の恐しさ、義理人情よりも自力身上の物凄さ、憤つて振り土ぐる鐵拳より笑  
うて掴まる、懐中物の御用心、うか／＼歩けば何處に陥穽のあらうやら、沐猴にして冠す  
る紳士の威嚴、狼の衣を纏ひし説法、善き衣著たる商人の口車、高帽子に禿けた額の角を隠  
す鬼もあり、白晝に金齒きらめく化物もあり、人を殺すにも野暮な白刃を用ゐるすして虚名を



賣りし藪醫者と一般、そつと殺して置いて倒まに謝禮を取るの工夫さま、罪惡の喇叭を吹き鳴らして貪慾非道の得物を打振りつ、朝駟夜討の入り亂れたる當世に、そもく上田力が如き清淨無垢の男、しかも玲瓏として珠玉に等しき潔白の男が、何として其生涯を無事に保つべきや、

たゞ見る五尺八寸二十貫目の大兵、のツそりとして歩む時は春の野に出づる牛の如く、悠々として坐する時は賣れ残りし今戸焼の達磨に等しく、肱を枕に身を横たへて大の字に睡れる時は山門の仁王を引き摺り出せしが如く、茫として世に容れられざれど世に煩はさるゝ憂ひなく、漠として人に知られざれど人に屈せらるゝの用なく、おもむろに白眼をもて世上を睨み人事俗界の百般を一笑に附し去らむとするのみか、我みづから我愚を守りて日夜に跳ね廻

る智者才子を鼻頭に吹き飛ばし、我みづから我鈍を知りて富貴功名を臍茶の一興に嘲り、時にたまくと天真爛漫の滑稽を演じて洒々落落たるところ、例に依つて例の如き上田先生かの力の君も、あはれ今は最愛し可哀の妻を持ち空拳では濟まぬ一家を構へて浮世の風といふ奴に襲はれしより、忽然この可憐漢も世間普通の利害得失に聯りて、何とやら社會の複雑混亂を顧みつゝ、こゝろ然として居家處世の方便を求めむとす、

みれば宛然たる古壯士の風采、また其心は潔白單純にして太古の民に等しく可憐の小兒に似たる斯の上田力が、妻といふものを持ちしがため俄に山の如き大兵の身を驚かして紛々たる俗世に衣食の道を求めむとするさへ哀れなるに、運命の神は何の戲事ぞ、多年の貞婦に棄てられたる氣息奄々の病友かの黒田健次が最後の成る果てをも其身に背負はせつゝ、日夜惡魔が毒刃をもて戦へるが如き大俗の眞只中に投ぜむとす、そもく何たる悲惨ぞや、



されど上田力また例に依つて例の如き上田力にあらで、猛然として起ち翻然として奮ひつゝ、罪惡の形づくれる如き今日の社會に對うて十日間に生涯の工夫を探り出さむとす、あはれそもく、何の業ぞ、

人も人、世間も世間、かの上田が如き一直線にして更に曲折なき單調の男が、日夜の怒濤激浪に等しき今日の社會に對うて、夫婦生涯の工夫を十日の間に探り出さむとす、しかも昨日今日やうく、時定めし二間まぐちの借屋住居に巢を構へての新世帯、まして身に一錢の餘裕もなき丸裸の赤手を振り廻して何をかなすと、汐入村以來こゝに十餘年の親友たる川上三吉しきりに眉を擧めて小首を捻れども、さては其事かと思ひ當るべき業もなきのみか、元來あの上田が天生として自己が信ずるところの成敗を見ずんば他人の言を容るべき筈なく、また

今更ら幾何の財力を與へむとすれども頑として受くべき筈なければ、たゞ人しれず心を惱まして我身の如くに案じ煩ひぬ、

十日といひし其七日目の夕暮、例の如く飄然また忽然、ぶらりとして玄關へ訪ひ來りし上田が聲に、をりしも奥の一室に差對ひし川上夫婦が、何とやら待ち兼ね顔に心いそぐ出で迎へて見れば、さすがに浮世の常、かくても妻といふものを持ちし良人の身とて、今までの垢染みたる布子一點しかも裾から襠褌が下り藤の紋所ちやと鼻唄うたうて通せし破帽弊衣の上田にあらねども、元來が人並すぐれし大兵肥滿に幾度か仕立直せし木綿尺の悲しさ、猪毛の手足ぬつと現れて纏ひかねたる首筋元より襟の胸巾さへ合はず、石臼に似たる臀の邊りは絲の縫目も張り裂けむばかりの體、例のステッキを横たへて腰に六合分の握り飯を入るべき空辨當をぶらつかせ、五分刈の頭髮は大道の砂塵埃に塗れて白く、おのづから市中の煤を吸ひ込



む獅子ッ鼻の洞穴のみ黒く際立ちて、武者髯むしやくと伸び大目玉ぎろくくと光らせながら、山の如き兩肩を怒らし泣くやら吼ゆるやら正體さらに分らぬ満面の笑を浮べつゝ、「やア御夫婦お揃ひの出迎ひとは恐縮々々、今日は例の處世探險で日本橋方面から此濱町をかけたの涉獵さ、ところで、いづれ歸途は門前通行の道順になるから是非、立寄らうと思つて居つたのさ、さればとて別に用はなし、たゞ時に當家の夕飯は既に已に濟めりかね、ハ、ハ、ハ、ハ、何まだ濟まない、今これからは天いまだ上田を捨てざるところ、久しぶりで馳走にあづかりたいね、實は十日を期して今日が七日目、東天の鴉聲と共に飛び出し宵の明星を仰いで四里四方の隅々まで、毎日てく／＼歩きの一所懸命に梅干入の握飯ばかりで聊か閉口の折柄だ、ハツハ、ハ、ハ、ハ、どうです細君、この笑聲も以前の笑ひ聲と少々調子が違つてるでせう、あはれむべし近來さらに膏ツ氣がなくて咽喉の樋に多少の損所が出来たからです、

ハ、ハ、ハ、ハ、それ今かういふうちにも段々と音聲が薄く低く幽に遠くなりゆく體、可哀想でせう、ハ、ハ、ハ、ハ、もはや無効だ、ハ、ハ、ハ、ハ、こゝに至つては悲鳴と一般、おのれの笑聲が自己の腸に徹へて響きますね、あ、堪らない』

上田の天生、今更ならねど、川上夫婦も思はず顔を見合はせて吹き出しながら、いざとて奥の一室へ導けば、朝夕に掃き清めて拭き磨いたる廊下に大の足跡べたく、下女が眉うち擧めて頬を膨らし目を丸くすれども先生さらに關せず、其まゝ悠々と打通りて我家に歸りしが如く、さし出す坐蒲團に會釋もなく石臼の腰骨を埋め込んで、ふと傍らを見れば古伊萬里の鉢皿に積み重ねたる羊羹、をりしも腹は空いたり時刻はよし、おもはず我を忘れて右手を伸ばすや否、細君ちらと見付けし目と目に流石の上田も何とやら俄に掴みかねたる顔色、さりとて今更ら驚いて引きもならねば、羊羹の上まで届きし五本の指頭を一時に縮めて小田の蛙



の鳴き損ねたるが如き鼻頭に小皺を寄せながら、「細君、こゝ此手どうしてやりませう、けしからん奴です」

細君はツと顔を赧めて呵しいやら氣の毒やら、果は堪へ兼ねて身を反けながら、「ホ、ハ、ハ、ハ、あら上田さん何ですよ、御戯談を仰しやらずに、どうか召上つて下さいなね」「いや、お言葉ですがね、實は今、あまり甘さうな羊羹で咽喉が鳴つて堪りませんから、禮に慣れざる野人の本體、つい何心なく出した手を貴女に、ハ、ハ、ハ、ハ、それも抓みあげた以上は寧ろ何でも無いこつてですが、五指おもむろに下して今や將に抓み上げむとする一刹那でしたから、妙に變な工合で聊か狼狽しましたね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、男の目ぢやア眞正面から穴のあくほど睨み付けられても平氣ですが、ちらと女の横目で見付けられたといふもなア頗る薄氣味の悪いもんですな、しかし御許容の出た上は安心して喰ひますよ、構ひませんか、喰ひますぜ」「あれ、

上田さんは嫌な事ばかり仰しやるよ、何だか妾が」「いや、決して貴女を世間普通の世帯鼻アが食客扱ひの目元と一般に言つた譯ぢやアないんですがね、此方が氣まり悪さの遣り場に窮して、ついね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、なるほど、うまい羊羹だ、こいつは堪らない、なか／＼喰へるわい」いひつゝ茶も湯も飲まず脇目もせず、むしやく／＼と喰ひ盡して脣端を舐めながら、「や、これで先づ一時の瀾縫策、どうやら空腹の手療治だけは出來たやうですから、夕飯は別に急いで下さらなくつても宜しいよ、あまり取急いで有合せの番菜などは却つて雙方のためになりませんからね、ハッハ、ハ、ハ、ハ、」

をり／＼強ねて憎まれ口は聞けども腹の底に一點の毒なく、たま／＼無遠慮に過ぎて人を驚かせど何處やらに自然の愛嬌を含んで、果は川上夫婦も我を忘れ手を拍つて笑ひながら、やがて運び出せし夕膳の外に殊更ら取寄せたる酒肴を見るより、上田先生さらに満面の笑を浮



べて俄に二十貫目の居坐を立直しつゝ、『あゝ父子兄弟なほかつ眼前の利害得失に依つて反目する當世に、この頑たる愚鈍を憐れみ、この無禮漢を許しての欺待厚遇、いつもながら感謝の至極だ、さらば芳志をいたゞくよ、しかし僕アお手製の菜と酒さへあれば結構、特別に取寄せられたる折角の料理は此まゝ貫つて歸りたいね』いひつゝ、大の兩眼じろくく小兒の如く珍味を見渡す風情に、川上おもはず哀れを催して妻と顔を見合はせながら、『なアに皆、君のために取寄せたのだから殘餘なく遣つてくれ、家へ持つて歸るなら別にまた言ひ付けるから、しかし家に歸つて細君に頼つといふは千古の風流、達人の滑稽、その優しさは妻として萬金に代へ難き賜物さ、ねエ』

かくと聞くや否、今しも笑を含んで箸を取りし上田力、ふつと俄に何をか感じけむ、其まゝ、其箸を宙に持ちながら兩眼を閉ぢて暫し無言の體なりしが、やがて一滴の涙ほろりと膳の上

に落しぬ、『粗衣粗食に甘んじて前途さらに茫漠たる無能の我に生涯の運命を託せし可憐の妻が、はや夕暮の空を見上げて今や歸ると我を待ちつゝあるのみか、あはれ十年の苦樂を俱にせし最愛の貞婦を先だて、自己も將に其後を追はむとする氣息奄々の病友が、重き枕を飲つて我の歸りを待つかと思へば、川上、もう僕ア食ひたくない飲みたくない、酒も肴も止さう、願はくば此のまゝ料理そつくら貫つて歸つて、せめて一夜を慰めてやりたい』君の歸宅を待つ妻の外に誰が居るんだ、その病友とは』『誰でもない、かの黒田がこつた』『えッ黒田が君の家に、いつから、どうして』『三日以前、ふと途中で逢つた前は既に半死半生の重體、それも其苦さ、彼奴がために玉の輿を乗り外して十年の日夜を泣きの涙で立て通した不幸不運の貞女、かの島なるものが君、あはれむべし一朝こゝに死して其あとに取残されたる健次の病勢、ありやア當然さ、まだ多少の前途不見と元來の横著心が腹の底に残つてる奴だから、う







其二

繩にからけし三升の酒樽と古手拭に結びつけし折詰料理を提げて、はや暮れし宵闇の門口へ悠然として歸り夾り上田力、片手に格子戸がらくくと引き開ければ、まぢかねし妻のお清いそくと出で迎へて、嘸や草臥れ給ひしと口に言はねど心の働き身の振舞、縮めたりし吊ランブの心を捻り出して俄に照らしながら、良人の前後より袖を拂ひ裾を拂ひ汲み來りし水もて馬の如くに足の爪頭まで濯ぎ洗ふ體、白粉氣ふんと匂はして長火鉢の彼方に坐したるまま口頭の義理百萬遍を轉る絶世の美人よりも馨し。

『良人どうなさいましたの、いつもより今日は大變に遅かつたことね、そして其、その手に提げて在らッしやるのは、何處から』『ハ、、、これか、こりやア川上の家へ立寄ッて貰うて來たのさ、や、酒も飲め料理も喰へと、相變らず氣の宜いものさ、夫婦で右左から勸め

てくれたがね、酔ッちやア猶更ら遅くなるからッて、其まゝ悉皆、この通り引提げて來たのよ』『おや、それちやア良人まだ夕飯を召上らないんですね』『いや喰ッた、この酒と料理は別に取寄せてくれたのだから斯うして無事に持つて歸ッたが、時分が當然に出した夕飯の膳は即座に平けて仕舞ッたのさ、しかも空腹で立つけに盛り上げたのを十一杯、あとで茶漬が三杯か、たしか四杯だッたらうよ』『あらまア、いくら何だッて、よく喰べられましたことね、しかし良人や、妾が居ッた頃は構ひませんが、今ぢやア氣心の知れない臺所の人達ばかりですから、あまり從來までの流で遣らないやうにして下さいよ、まして不自由ながら斯うして家もあり妾といふものもあるんですから、あの御夫婦こそ何をしても氣にする方ぢやア御坐いませんが、とかく奉公人の下種口は喧しい、うるさいもので、つい良人、いろんな陰言を言ひますからね、さぞ給仕に出た下婢が驚愕しましたらう』『ハ、、、驚き居ッた



様子だね、しかも和女が知ってる平戸焼の古風な大茶碗だからな、およそ水なら二合半か小三合も入るだらう、全體あの茶碗は和女が見立て、乃公のに極めて置いたんださうだね」  
「ホ、ホ、ホ、思ひ出しますわ、良人が始めて入らした時、通常の客に出すお茶碗で二十何杯、こりやア堪らない、お給仕が面倒だから、いッその事、ドンぶり鉢にでもしようかと思つたんですが、それぢやアあまり失禮だからと、やうくあの大茶碗を見付け出して良人お一人ぎり特別にして置いたの、思へば妙なモンで其お茶碗が、そもく縁の端でしたよ、それこそ記念のため貰つて在らッしやれば宜いに」  
「ハ、ハ、ハ、馬鹿な、何を言ふんだ、つまらない、時に二階の病人は」  
「はい、今日はね、朝から御氣分が宜いッて、ぶらく一室で運動もなさるし、お粥も平常よりは」  
「む、さうか、そいつア先づ安心だ、もう寝たやうだね」  
「わけて今日は病氣の宜い故か、心持よく頻りに睡氣がさして堪らないから、上田の歸家ま

で待つ筈だが御免蒙ッて寐ると仰しやいましたよ」  
「ぢやア静閑にして置け、しかし折角持つて歸つた料理を喰はせないで残念だ、何か、この中で一品ぐらゐる口に合ふものがあるだらうから先づ彼奴に撰喰をさせてやらうと思つたに、ぢやア和女そのまゝ喰ッて仕舞へ、まさか宵越しのものを病人に遣れまい、さア喰ふが宜い、随分うまさうだぜ」  
「妾もいたゞきますが、良人も、それほど召上つたんですから御飯は止して、ちよいと御酒ばかり」  
「いや、その邊の豫算なきにしもあらず、故に酒は一滴も飲まずに樽ぐるみ提けて歸つたのさ、三升あるからね、一升づゝとしても三日分」  
「あれ、一升も良人」  
「いけないか、ぢやア九合、もしそれも叶はずんば八合半、乃至七合ばかり」  
「ホ、ホ、ホ、ソナな未練らしい事を仰しやらずに五合とか三合とか思ひ切つた分量になさい、一日市中を駆け廻ッて草臥れた身體へは酔が早くて毒ですよ」  
「ぢやアせめて六合にしてくれ」  
「あれまア良人にも似合はない吝な事を仰し



やるよ、誰が一掬も飲みますものか、どうせ良人が悉皆お飲みなさるんですから、一日でも長く置いて楽しんで方が宜いでせうにね』『なるほど道理だ、しかしね、そもくこの酒といふものは』『あれまた、そう小むづかしい議論をなさるなら、妾は知りませんから三升樽そのまゝ、口うつしの一息に瀧香をなさい』『いやさ、おい、さういふ譯ぢやアない』『さういふ譯でなきやア五合、なりませんよ六合だとか五合半だとか、まぎららしい曖昧な事は』『しまつた、こんな事と知れば川上の家で錨を卸して、うんと飲んでやるんだつたに、え、仕方がない、門を出て、は男天下、家に入つては鼻ア天下、さて佛法と鐵砲と女房の勢ひ、いづれの世にも凄じいもんだ、ハ、、、』『そんな減らす口を仰しやると一滴も飲ませませんよ』『や、いよく恐縮々々、もはや何とも申しません、只お情に依つて思召に叶ふだけの分量をいたゞくのみ、しかし榊目だけは宜くしてくれよ』『ホ、、、、まさか他人の間柄

でもないから其邊はね、仰しやらすとももの事、おとなしうして在らつしやい』

八寸の膳を四寸づゝ分けて喰ふ差對ひとは小唄にうたふ世の諺なれど、これは曾ては自炊に用ゐる時に机となり時に俎となり俎は朗吟の腰掛となり假睡の肱枕となり横に仆しては隙間もる寒夜の袖屏風ともなり倒まに翻しては首と尻とを持たせて夏の夜の蚤を防ぎ涼を入れし宙乗の寐臺ともなりつゝ、汐入村以來、こゝに幾何の艱苦を伴ひし三尺四方杉板の大机、今は夫婦が置据の膳部となりて昔を忍ぶ落書の跡まッ黒なりしを妻が朝夕の雑巾に拭き馴れて漆の如く、ランプの反射に照り添ふばかりなる上に持ち歸りし折詰の料理を開いて、あはれ五合と限られし酒の味は一入さらに甘露々々の舌鼓、宛ら秋の夜の馬追蟲に似たり、  
『どうも酒といふ奴、いつ飲んでも愉快だ、わけて川上夫婦が芳志の熱燭といひ和女が銚子の漬け加減といひ、また格別だ、ハ、、、、さア料理を喰はないか、乃公は酒だけで結構、











いはゆる浮世の才子より見れば事に疎く時を知らざるの愚、いはゆる術数の策士より見れば殆ど齒牙にかけられざるの癡、富貴の目よりは乞食に等しく、權勢の目よりは瓦礫に等しく、頑たる硬直おのづから世俗に容れられず、寂たる孤立いたづらに市井の嘲弄を招いで、生來こゝに二十八年の間、いまだ曾て社會に一寸の席も得取らざりしもの、しかも今日その社會は才子の便佞と策士の術數と富貴の豪奢と權勢の跋扈跳梁をもて世俗に誇り市井を形づくれるもの、さらば我こゝに愚なり癡なり乞食瓦礫に等しき境涯として友を扶け妻を慰め最愛の子を育てむとす、さても難い哉、難い哉と人しれず五尺八寸二十貫目の大兵を縮めて壁に對ひつゝ、無言の心中、誰か憐れむ、隙間を漏れ來る秋の風そよとの音もなく肌に染み渡りて、そもくこれが押し寄する浮世の斥候かや、ぞつと骨まで寒し。

其三

十日と定めし七日八日、はや今日は九日目、あすの一日が浮世の瀬戸際、人生の禍福吉凶ただこの一刹那にありといふ其日の朝、上田が身に家を出で、心易く訪ふべきところは四里四方の大都會に濱町河岸の川上あるのみ、いつもながらの大聲張り上げて玄關に叫ぶかと思ひの外、今日に限りて肅々たる體、しづかに案内を乞へば生憎川上が不在のよし、さらば細君にてもよし、是非に逢ひたしといふ、

外ならぬ客とて、其まゝ一室に迎へ入れつゝ、慇懃に待遇せば、上田も會釋して坐に就くや否、例の鉢皿に盛り上げし羊羹ちらと目につけども、あはれや先日の失敗に懲りて容易に手も出さず、たゞ茶のみ飲んで何とやら更りたる風情に、川上が妻女おもはず微笑を浮べながら、『上田さん、どうなさいましたの、良人が居らないからツて貴君、さう眞面目になさらずとも宜いちやア御坐いませんか』『いや、今日は例に依つて例の如き由來の上田力でない、ちと







「なりますな」『あら上田さん、何だか妙に眞面目な、いつもの貴女にも似合はない事を仰しやるよ、しかし御恩は御恩、今でも決して忘れませよ、あの時、もし其まゝならば水に溺れて死んで仕舞ひますところを、貴君に救つていたゞいて、またこの東京で御目にかゝつて斯う深い御馴染になるとは、良人も貴君から渡していたゞいた縁、つまり汐入村に在らつた五人の方の中で貴君が、一番の古い御馴染ですもの、ねエ』『なアに恩といやア僕こそ大恩を荷つて居ますさ、始めて汐入村へ尋ねられた時から、川上が婿となつて以來は猶更ら、上田力が由來數年の生命は實に當家の賜物、まして今の妻は當家多年の婢として慈愛をうけたるもの、いはゞ夫婦もろとも恩家は唯この家ばかり、故に今日あらためて御禮に出たのです』  
 『おや、何ですなエ上田さん、他人行儀に、あらためて御禮だぞと』『お禮のみならず、暇乞に來ました』『もう妾は嫌です、知りませ、貴君から、そんな事を承るのは眞平です、ど

うか良人の歸るまで』『いや、決して例の戯談ぢやアない、眞實、今日は感謝に出た上田力です、今更ら改めて言ふべき事ぢやアないですがね、この上田は御存じの通り論外の難物かくの如き愚物鈍物で、檻に捕はれた猛獸と一般、人間界に遠い山奥か谷間で、もあれば、また自己の天生を恣にして俗世を罵るだけの料簡はありますがね、すでに一家を構へて妻帯した以上は即ち人間界の上田力、逆も世間普通の活動がないのみか、わるくすると浮世の連鎖に繋がれたまゝ箱の中へ打ち込まれて觀覽物になるかも知れないです、その無能無爲にして癡鈍なる上田が、こゝ一兩日のうち社會へ乗り出して、ハ、ハ、ハ、ハ、社會へ乗り出すといへば體裁が宜しいが、まづ世の中の最も下層なる泥溝板の端くれに這ひ出して、自營獨立いやこれも言語が穩當でない、つまり飢ゑて死せざるの方便を取らうと決心したのです、とこゝろで斯く決心を極めて實行する曉は、もはや再び當家へ押し寄せてさ、おい川上、酒を飲



まさにか、ねエ細君、腹が減りましたなど、けしからん不埒な所爲は勿論、かりにも門前に足を踏み掛けず途中で逢つても言葉を交さない覺悟です、しかし、こゝは變に取つて貰つちやア困る、實は僕の如きものが、今日の社會に這ひ出して衣食の道を求めむとすれば、既に自己の身を落して凡俗以下の賤業を取るより外はない、ね、ところで一朝その賤業者となつて僅に露命を繋ぐ一個の下等民が、いやしくも門戸を張つて當世の紳士と稱せらるゝ夫婦へいかに舊友とて明りに押し掛け行くなンざア頗る相方の不利益です、つまり貴女の方では威嚴に關して無形の損を醸すの恐れあり、また僕の方では人間境遇の比較的から打算せられてさらぬだに惴々たる不快の賤業ますゝ不快を重ねるの結果、忽ち有形の損を蒙る恐れありだ、ね、と斯ういへば貴女の心ちやア、あゝ馬鹿は何處までも馬鹿強情なもんだ、上田は良人の舊友その妻は妾が手許に召使つた下婢、たとひ夫婦が年々月々の衣食を呉れてやつて

も差響く身代でない、と思はるゝかも知れませんがね、其處は即ち上田の頑たる愚あつて我みづから我を制する能はざるの狂態、なるほど我等夫婦の者が當家の餘徳に悠々として生活するの幸は幸なりと雖もさ、もし我等夫婦の間に子でも出來た曉は如何です、あはれ願はくば妻をして他人のために生活せる良人を持たせたくない、あはれ子をして他人のために生活せる父は猶更ら持たせたくないからです、由來の恩義を感謝すると共に將來に對する浮世の暇乞に來たとは以上の理由、どうか貴女から川上へ、よくね、よつと傳へて下さい、また折角これまで永久の間さらに何の落度もなく奉公してくれた婢を可哀さうに、つまらない男へ遣つたとの後悔もありませうがね、その段は安心して貰ひたい、あの清なるもの今日は既に上田力が妻です、土を喰はゞ諸共、砂礫を嚙らば諸共、さらに他を見返り餘所を羨む女でないです、しかし、それがため却つて一入この上田が男泣きの種ですよ』



いはゆる世の才子流より見れば我みづから我を苦しめむとする愚の極に似たれども、その天生としては正に斯くあるべき筈の上田力、語り終りて今まで堪へし兩眼の溜涙ほろく〜と一時に落せば、何とやら物の哀れに打たれて身も心も引き入れらるゝが如き川上の妻女も、鬼に等しき上田が泣面を見るや否、あるにもあられず其まゝ、兩の袖を顔に押し當て、聲を呑みつゝ泣き伏しぬ、

泣けば泣かれ、泣かるれば泣く、戀ならねども互の情に終局なければ、上田力まづ涙を飲めて膝を進めつゝ、「ちやア、もう歸ります、随分お身體を大事にして御機嫌ようなさいよ、また川上の事、妻として良人に對する貴女のこつてすから、僕の如きものが無用の言ですが、どうか能くね、優しい事へてやつて下さい、萬に一つも幸ひにして人間らしい身にでもなれば、また従來のやうに遠慮なく伺ひますから、まづそれまでは殆ど音信不通、ところで上田

が寸志として貴女に呈すべき物があります、愚物をり〜思ひ出して貰ひたいといふでもなし、忘れずに再會の期を待っていた〜といふでもなし、こりやア唯、ほんの滑稽半分、赤裸の上田が贈物いは〜一時の戯事です、しかしながら、萬金を携へて東京市中を駆け廻つても俄に得べからざるもの、いかな華奢全盛の貴婦人と雖も所持せざるもの、即ち斯品です、もし男ならば煙草入か何かの緒締だが女の貴女ですから、まづ簪の玉にでもして下さい』いひつゝ、袂を探つて丸く小さく紙に包みし物を取り出し、うやく〜し氣に妻女の前に差置きしを、何ぞと披いて見れば一個の玉、玉は玉の形ながら瑪瑙にあらず琥珀にあらず眞珠にあらず珊瑚にあらず翡翠玉にあらず孔雀石にあらず流行の鷄血にもあらずして、唯これ光輝もなく艶もなく風情もなく趣味もなく金屬か石屬か天然か人造か更に判然せざるもの、ほんやりとして薄黒き中に黄と青とを帯びて一種いふべからざる色合、およそ五分玉とも稱すべきほ



どにて持てば案外に重量あり、さても如何なる品質ぞと頻りに眉を擧むる横顔、上田力じろりと打見て座を乗り出しながら、「いまだ會て見た事はないでせう、さらに何か分りますまい、いまだ目に見ず更に分らざるところが即ち其物の貴重にして珍なる所以、また上田が贈物たる所以で、そもくその玉は僕の鼻糞です」「え、ッ」「儲、さう驚いたばかりぢやア何の趣味もなく味ひもなく、只これ汚穢といふばかり、手に取るだも貴女お嫌でせうがね、およそ人間の鼻糞を絶えず集めて油断なく押し固め、それほどの寸法と重量にするまで、どれほどの苦心と幾何の歲月を費すと思ひ給ふ、なか／＼一朝一夕の業ぢやア出来ませんよ、まして鼻糞も鼻糞、不愉快な時や面白くない時また身に病あり心に苦痛などあつて、悠々自然の外に出来る鼻つまりの駄糞は更に捨て、用るないですから、結局、鼻糞中の最も神聖にして清潔なるところのみ、ちよい／＼と小指の爪頭に搔い取つては溜め込み、一定の紙に包み箱

に藏めつゝ茲に三年と七箇月の間、積み積つて得たるところが其玉です、歲月の久しきがため殆ど化石して堅きこと鐵の如く、質は既に人造を脱して臭氣を去り汚穢を遺さず、もし語を設けて言はゞ正に是れ浮華輕佻の外に於ける一種の名玉、心情の熱誠と耐忍の美德とを以て懇慫に押し固めたる珍品、そもく萬金を投じても俄に求め得られますかね、上田力が謹んで貴女に呈する所以、願はくば金脚を付けて幾久しく愛藏して下さい、ハ、ハ、ハ、ハ、何としても上田は上田、この悲慘の中に斯る滑稽を演ずるのみか、その滑稽の中また自然の愛嬌を含み、その愛嬌の中また言ふべからざる眞實を含んで、呵しいやら馬鹿らしいやら有難いやら迷惑やら、取るにも取られず、返すにも返されず、さりとして今日は例に依つて例の人にもあらじ、とはいへ如何に奇を奇めばとて、そもく鼻糞の押し固めたる五分玉に金の脚をつけて頭に戴かるべきや、なさけない賜物を受けたりけりと、川上の妻女おもはず涙く



みながら、ふつと吹き出して半泣きに笑へば、さすがの上田も我を忘れて、ハツハツハツ

其四

いよく十日目の今日こそは我運命を定むべき最後の日限、いはゞ浮世の旅の首途ぞと、なほさら早く立出でし良人を妻のお清そのまゝ門口に送りだして見渡せば、まだ家々の夢さめずや町つゞきの軒端うす闇う、秋ふけし夜明の空に肌寒く、ゆうべ一夜を取外せし辻待の車夫が轅棒に腰うちかけて居睡りながら股間に夾みし提灯の火影ほつと残りて、霜や置くらむ乞食の子さへ通はぬ曉方の路上を、犬に吠えられつゝ山の如き大兵を動かして歩み行く良人の後影、さても氣の毒や何を目的に如何なる業をせむとてか、あれをあのまゝの男一人で通さば空嘯いても通るべき立派の身を、こゝに連れ添ふ妻の我身ある故、いとしや斯ほどの

苦勞さすかと思へば思へば涙の種、をりしも何處の鐘やら幽に響く音さへ身に染みんと物悲し、

たとひ氣に合はずとも官界の端か、よしや心に染まずとも會社めいたるところか、但しは其事に類似の身に叶うて月々これと定まりし給料でも取る事ならば、同じ悲しき中にもまた諦めて道理と思へど、人に追ひ使はれ人に頭を下けて養はるゝは死ぬより辛しとて、この世智辛い世の中に一錢の貯蓄もなき赤裸の身一個、しかも元來あの氣象で一家の道を探し出さむとは、かへすくも竹楊枝で石臼を貫くとやらの世諺、とても成らぬと知りながら今こゝで諫めても歎いても一切きかぬ氣の良人、されば十日といひしも今日の一日、せめて今夜の歸家を待ち受けて委細を聞くか、あすの朝の起き出づるを待つて其様子を見るか、いづれにせよ、思ふだけの事、するだけの事をさせての後ならでは、我身の言葉を用るまじとて、其



まゝ家内に入りつゝ、猶も行末を案じ煩ひぬ。

をりしも其日の午前九時ごろ、門口に車の響き差止りて格子戸の開く音に、お清ふと見れば川上の妻女が入り来る體、「おや奥様、まア貴女お一人で、もし御用でも御坐いますなら妾から伺ひますに、さアどうか此方へ」「何ね、来て貰ふほどの用でもないから、ちよいと、時に上田さんは、お不在だらうねエ」「はい、相變らず例の通りで、今日は猶更ら朝早くから」「それは宜い都合、ぢやアゆるく話ませう」「しかし貴女、むさくるしう御坐いますよ、ホ、ホ、」

もとは七年越しの主従ながら今は友達同士の妻と妻、されば川上の妻女より殊更に言葉をやわらけて優しくすれば、せらるゝほど浮世の常、お清また昔を忘れぬ心に一入の眞實を込めて良人と良人は兎も角、召使ひし身と召使はれし身の禮儀を捨てじとて、いよく慇懃に取扱

ひぬ。

「貴女まアお一人で、わざ／＼妾方へ、いかやうな御用で、さのみ遠いところでなし此方から日に一度つゝは御伺ひ申さないぢやア濟まないで御坐いますが、ホ、ホ、ホ、妙なもの貴女、こんな小さな茅屋でも一家の世帯になりますと、ついで出かねまして」「其事はお互さ、また今日かうして来たのも別に大した用でも何でもないですがね、久しぶりで顔も見たし、また上田さんの事に就いて少々、勿論、良人と相談して來ましたの」「おやく、それならば猶更、妾から伺ひますに、御存じの通りの良人で御坐いますから定めし御迷惑な事ばかり、妾が御奉公いたして居ります時でさへ、おほえが御坐いますもの、あの一本調子で例の變屈、きつと持て餘してお困り遊ばすだらうと、をり／＼陰ながら心中でお謝罪いたしてばかり」「いえ／＼さうでない事よ、かうして一家を持つてからは何處やら昔の上田さん



と違つて来て、をり／＼お世辭や愛嬌を、しかし其お世辭も愛嬌も、あんまり不意の唐突でホ、ホ、ホ、實は御挨拶に困る事があるのよ、昨日の朝もへらしつてね、いろ／＼寂寞とした眞面目な談話なざるから妾も思はず涙ぐんで居る其中で、簪の玉を遣ると仰しやるの、どんな玉かと手に執つて見れば品質といひ色合といひ、さつぱり何だか分らない見た事もない不思議なもので、何といふ玉ですかと尋ねると、すまじきつて、そりやア僕の鼻糞を固めたんだとさ、ホ、ホ、ホ、それから其鼻糞についての講釋が凡そ二十分ばかり』『あらまア、けしからぬ、貴女に、あの鼻糞の玉を、いえさ眞實で御坐いますか、まアあの良人は、實は貴女その玉を始め妾に遣ると申しましたんですが、聽いてみて腹が立つやら呵しいやらあまり馬鹿々々しいから物も言はないで其まゝにして置きましたの、それを人もあらうに貴女へ、いや、よろしう御坐います、いくら戲談は戲談でも、あんまりな良人、今夜、歸りま

したら頭上から噛み付けてやります、いやはや呆れた事をする、油斷も寸隙もなる良人ぢやアない、嗚お腹も立って在らつしやいませうが、どうか貴女この清に免じて』『なアに上田さんのこつたから、決して悪氣で下すつたのぢやなし、また講釋を承れば全く深切の筋もあるのだから、むやみに小言をいはれては却つて妾が困ります、そんな事は兎も角、今日ここへ來ましたのはね、あの上田さんが近日、何か思ひついて商賣とかを、なさるとの事、そりやア眞實ですかね』『いえ奥様、其事に就きまして、妾から御相談では恐れ入りますが、どうか御心添へを願ひに出ようかと存じて居りました折柄で御坐います、なるほど、かうして一家を構へた上は、いつまで人様の御厄介になられるものでもなし、いづれ何とか身分相應の工夫をつけて、とは妾も最初から氣を揉み抜いて居りますが、またあの良人のやうに、いや十日のうちに探し出すの、誰が何と言つても乃公が遣つて退けるのと、萬事このむづかし



い世の中で眼前の物を掻いたくるやうには、逆も貴女どうして、それも世間普通の良人で御坐いますれば、また男の分別は格別なもの、少しの安心も出来ませんが、何を申すも御存じの氣性で、しかし其十日といふ日取も今日一日、まアそれまでは差控へて何とも言はずいざといふ時に、妾は妾だけの料簡を出さうと、かやうに心を極めて居りますの』實は其事に就いて妾も良人も大變に心配して居ますのよ、外の人ではなし、なみくの氣性ではなし、あまり心が潔白すぎて立派すぎて今の世間にも逆も、まして馴れもしない業は猶更ら以て、だからと言つて止る人でなしさ、それかと言つて其まゝに見ても居られず、こりやアイツその事、表門より裏口からの世諺で、自然に引き止める工夫が第一、しかし良人のいはれるには、あの上田は外貌によらない妙な呼吸があつて、萬事ほつとしてるやうだが其實なかく腹の底に鋭いところがあるんだから、やるといふ事は遣らして見るが宜い、どんな意外

な名案を出して驚かすかも知れない、たゞ知れきつてあるのは金のない事、そこでまづ兎も角も百五十圓、これを上田の妻に渡して置いて、もし中途で事は出来たが金に困るとか、また不幸にして遣り損つた曉、一時の用意金にと、斯う言ひ聞かされて其お金を持つて來ましたの、だから此お金は上田さんに見せないで、まさかの時の用意にね、もし最初から打明けて見せでもしたら其事こそ大變、妾等の心が無になるばかりか、あの氣性なもの、どんな議論を吹ツかけられるかも知れないよ、ホ、ホ、ホ、そして上田さんは以後しばらくの間は音信不通にするよ仰しやツたがね、それは上田さんの事、をりくそツと様子を手紙でね、妾まで胸帯の間より白紙に包みしまゝの金子を差出せば、お清たゞ何事も得言はず、涙を浮べて押し戴きながら、差俯いて泣き入る體に川上の妻女も思はず顔を反けつゝ、『上田さんは、あゝいふ氣性の方で、假令どんな事があつても態と惡氣でなさる筈は決してないんだから、その



邊を能く呑み込んでね、必ず逆らはないやうにね』『はい、はい、ありがたう御坐います、何と申す御縁やら七年越しの御奉公中も、わけて御恩になりました上、身の嫁期を付けていたやいた今、また、かやうに御苦勞ばかりかけまして』『いゝえさ何事もお互、上田さんと良人が兄弟同然なもの、また其人に連れ添ふ女は女どしの同胞で、なんの遠慮も入るものですか、そして今いうた手紙のこと、をり／＼の様子を、そつとね、これは妾ばかりでないの、第一が良人の依頼ですから』『はい、承知いたしました、申し上げるさへ恐れ入りました事で、ただ此上とも御見捨なう、萬事よろしく、お願ひ申し上げます』『あれ、そんな、お見捨だなど、しかし、もう歸りませう』『でも貴女、まだお早う御坐いますから』『いえ、あまり長くなるど却つて、なアに逢はうと思へば同じ東京の市中なもの、どうしたつて直ぐ逢へるしさ、また』『で御坐いますか、それでは旦那様に、よろしう』『かりにも旦那様などと言つちやア

上田さんに悪いよ、やはり川上とお言ひなね、ホ、、、』『ホ、、、だつて貴女、口癖で御坐いますもの』

其日の夜に入りて歸り來りし良人の顔色、今更ながら差覗くが如くに打守れば、我おもひなしにや例の朱達磨に似たる色艶おのづから褪めて、ほつと太き眉の邊りに何とやら憂を宿せる體、しかも門の格子戸ひき開けて今歸つたと大音に叫ぶべきを、今夜にかぎりて其聲もなく無言のまゝ火鉢の傍に坐しつゝ、妻が汲み出す茶を一口に呑んで、しづかに天井を見上げ耳を敬てしが、また差俯き勝に横を見て獨り咬くが如し、『何でも宜いから早く飯をくれ』さては浮世の常、おもふまゝならで、あれほど走りまはりし十日の苦勞も水の泡になりしかと、はや良人よりも連れ添ふ妻の我身に胸迫りて悲しく、用意の夕饗そのまゝ持ち出づれば、



しづかに首肯うなづいて箸はしとりながら、いつもの大茶碗おほぢやわんに音おとたて、搔かツ込こむ勢いきほひもなく、わづかに平生ひじろの三分一さんぶいち、『あまり腹はらが減へり過ぎた故せいか、今夜こんやア飯めしも甘あまくない、すぐ寐床とこを取とつてくれ、もう寐ねる、あゝ草臥くたびれた、回首かうべ春秋せうしゆ二十七にじふしち、正是まさ臥龍ごりゆう始起はじめ時とき、畜生ちくしやうめ、ちよツ』舌鼓したつづみもろとも後方うしろの柱はしらに仆たふる、如ごとく脊せを凭もたせて、兩腕りやうでを組みつ、眼まなこを閉とぢしが、俄にわかに思おもひ出いせし如ごとく起おき直ただつて、『忘わすれたく、酒さけ、まだ前夜ゆうべの酒さけがある筈はずだ、酒々さびく、えゝ面倒めんどうだ、爛かんも下物さかなも入いるものか、冷酒ひやのまんまで大茶碗おほぢやわんについてくれ』かゝる時ときには猶なほ更さらら心こころを配くばりて意いを用もちるつゝ、さらぬも平たひらかならぬ氣きを荒あ立てじと、妻つまのお清きよそのまゝ起たつて酒さけを持ち出だしながら、『冷酒ひやでは良人あなた、毒どくですから、ちよいと爛かんをしてあげませう、なアに手間てまの取とれないこつてすから』『むゝぢやア宜いいやうにしてくれ、今夜こんやア、ぐツと一醉ひとよひに寐ねて仕舞しつて、いよく翌朝あすからだ、うぬツ、やれないといふ事ことがあるものか、

勇氣ゆうき一番いちばん、こゝが所謂いはゆるる男をとこかい、ねエおい』『はい、何なんだか妾わたしには分わかりませんが、いよく翌日あすからと仰おつしやるのは例れいのことですか、ちやうど今日けふで十日かめ目めですから』『むゝさうさ、例れいに依よつて例れいの如ごとく悠い々く寛くわん々くたる上田力うへだつとも、もはや今夜こんやだけだ、いよく翌日あすからは紛々ふんくたる市井しせい巷閭かうりよの凡俗ぼんそくに従したがうて齷齪あくさくたる一個いっこの銅臭どうく漢かんとなるのさ、今日けふも今日けふ、途中とちゆうを歩あるきながら大おほに發明はつめいした事ことがあるね、外ほかでもない、いはゆる古昔いにしへの仙せんなるもの、即すなはち畫えや詩文しぶんに残のこつてる仙人せんじんといふ奴やつね、ありやア決けつして世間せけん一般はんに思おもふが如ごとく神通力しんつうりきを得えて霞がすみを喰くらひ水みづを飲のんで生活せいかつした怪あやしいもンぢやアない、つまり志こころざしを當世たうせいに得えざる癡癡かんべきの高たかい奴等やつらが、その志こころざしを枉まげ其潔白そのけつぱくを俗塵そくぢんに汚けがされるが口惜くちやくしいから世よを遁のがれて山間さんかんに棲すんだものだね、しかも其山そのやま住居ずまいには必ず生涯しやうがいを守まもるべき殖産しょくさんの道みちを立て、居をつたに相違さうゐない、山やまを開ひらいて桃ももを植ううるとか梅林はいりんを作つくるとか米麥粟こめむぎあはの類るいは猶更なほさらの事こと、つまり自己おのれを養やしなうて天壽てんじゆを保たもつだけの用意よういはする



が其外の利慾には一切さらに關せず焉といふのみのこつたね、そもく、仙は讀んで字の如く山にある人といふの義、敢て不思議でも何でも無い、たゞ人生の俗塵を脱して悠々たる生命を山間に送りしばかり、これを思ふと今日かくの如き便利至極の俗界に生れながら乃公などは却つて古昔の仙人に笑はるゝかも知れないね、彼は人間を去つた山奥でも生活の道を求め、今この乃公は人間大俗の眞只中に居ながら生活の道知らなかつたのだから、ハ、ハ、ハ、仙を思へば仙ならざる我いよく、恥ぢて奮發せんければならない、しかし其處だて、ねエお清、いつもいふ月給取は眞平御免を蒙つて、まづ見渡した今日のところ、この乃公に出来るものは何だらう、この十日間に東京市中あらゆる隅々まで駆け廻つて種々さつたの業を見て歩いたがね、いづれも資本といふものが第一だ、人が働くより金が働く世の中、そこで二日目からは其資本なるものを要せざる點のみに意を注いで考へたが、さて資本なき業は殆ど不生産

的の業だ、不生産的を一步あやまれば忽ち破廉恥となる、この間の呼吸に頗る苦心したね、假令へば世間いはゆる壯士といふものだ、これならば持つて來いの仕事で、萬一の事があつても通常の男五人や六人は蹴飛ばしてやる乃公だが、さて忍びない、されば力業を切賣する土方か仲仕の類こいつも妙でない、いづれも嫌だと言つたところで、こちくと小器用な手内職は出來ず、お世辭だらくの口車で利を取る業は不得手なり、いろく、研究の後、さまざま考案を廻らした結果、こゝに五尺八寸二十貫目の體軀を持て餘すばかり、茫として一切さらに夢うつの中より、ふいと思ひついた事がある、ハ、ハ、ハ、鶏を割くに牛刀を用ゐるの歎ありと雖も、ちよいと呵しいこつた、がらにない小意氣なこつたがね、まア遣つつけてみるさ、しかも晝間は寐て置いて夜だけ稼ぐ業だ、資本は音聲ばかり、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし上田力が凡俗の小人なほかつ潔しとせざるところに屈して、いや、言ふま



い、今更ら何と言ッても無効だ、いよく遣ると決心した以上は大に進んで遣るべし、遣るべし』

わが良人ながら世間なみくの男でもあることか、圖に外れて飛び抜けたる大兵肥満の此體軀が、がらにもない小意氣な聲を資本に晝寐て夜稼ぐとは、そもくいかなる業ぞ、牛の吼ゆるに似たる胴間聲また破鐘の響くが如き大聲、どれほど高う通すればとて、夜ふけし往來を小唄淨瑠璃の流しでもあるまいし、此ごろ流行る編笠書生の何とか節さへ連も出来る人でなし、さては家々の寐靜まる頃を考へて夢おどろかす廣告屋の新意匠かと思へども、がらにない小意氣な事といふからは、まさか其事にもあるまじと、さまざまに思案をめぐらせども更に解しかぬれば、お清おもはず膝を進めて良人の顔を見上げながら、『全體、どういふ事な』んです、音聲を資本に晝寝て夜稼ぐとは』『なアに別段、どうといふほどの名案でもないがね、

第一この面を客に見られないのが便利の一事で、勿論、資本も入らずに其場で現金取引の早勘定、しかも相手が女で、ちよいと小意氣な事さ』『おや、いよく分らなくなりましたよ、良人が女を客にして、はて妙ですねエ良人が女客を相手にして意氣な聲が資本』『ハ、ハ、ハ、さう言ッたばかりぢやア分るまいがね、淡路島、かよふ千鳥の戀の辻占アさ、どうだい面白からう』『あれ、良人どうかenasったんぢやアないの、本氣ですか』『本氣さ、本氣さ、これが戲事で出来るものか、堂々たる偉丈夫、いやしくも青天白日の下に大道を闊歩し得ないで、心も闇の俗界中に最も卑しむべき花柳の巷、しかも臭氣紛々たる癡情の狂ふところに對うて五厘一錢の辻占を賣り歩く乃公が心中、察してくれ、あゝ思ひ出せば去年の夏だつたかねエ、和女が川上の使者で乃公を呼びに来てさ、夜は深し人影はなし寂たる兩國橋の上で幽に送る三味の音締を聞いた時、乃公が何と言ッた、元來あの三味線なンざア汚猥なる淫情を鼓舞す







や、まして色香の花柳といへば、辻占を買ふより聲に驚いて癪を起すべしと、さまざまに諫むれども上田先生さらに聞かず、おもむろに太き首骨を打振りつゝ、「獨身ならば誰が斯んな事をするものか、その妻あり聽てまた子あればこそだ、やかましう言はずに黙つて居れ、そもや辻占といふもなア十四五までの子どもか但しは戀の成る果てに身を落した小意氣な奴が美音で賣り歩くと極つてるもんだから、却つて乃公のやうな飛び抜けた大男の破鐘聲が彼奴等の耳目を驚かして不意の勝を占めるのさ、魚類で飽いた口へは野菜の世諺、才子は其才に誤り愚は其愚を用ゐて時に機を制するは此處だ、ね、また乃公のやうな無器用に間抜けた男が寸隙もない今日の浮世に這ひ出す初陣としちやア、この辻占を賣るぐらゐが分相應だよ、ハ、ハ、ハ、ハ、まア氣を揉まずに見て居てくれ、恥辱か恥辱でないかといふなア別の議論だからね、辛からうが嫌だらうが、じつと堪へて一夜だけ出してくれ、よ、この一夜で失敗を

取れば直に止すから、ね、わかたたらう、よし分らないにしろ、まづ分つたとしてくれるさ」

その夜は其まゝ、寐床に入りて枕に就きながら、偕つらく思へば定めなき浮世に人間の淺ましさ、曾ては天下の富貴功名を曉の一笑に付して我たゞ獨り昂然たりしのみか、もし志を屈し意を枉けて單に衣食の道を求めむとすれば、手をあげ足を投ずるところ従つて人事易々たる事と思ひしに、あはれ恐しや、日本一の大都會を十日間さらに油断なく駈け廻つて眼前これといふ業もなく、あすよりは身を辻占賣に落しつゝ、賤しき女童の手のうちに五厘一錢を乞はずば露命を繋ぎ得ざる我境涯、さてもくと今更に驚きながら、その夜の明くるや否、まづ二階に上りゆきて黒田の病狀いかに見れば、はや起き出で、瘦せ衰へたる身を窻に倚せつゝ、しきりに曉の空を打見やりぬ、



「おい黒田、どうだね、過日中は朝から夜まで毎日々々出歩いて居ったから、つい自然、うツちやり勝のやうで、さぞ淋しかつたらう、勿論、ぬかりのないやう萬事を妻に言ひ付けて置いたがね、や、大分に顔色が宜いやうだ、少しは氣分が引き立ったと見えるな、今日は幸ひ一日このまゝで家に居るから、ゆるく語らうよ、ねエ、とかく疾病といふ奴ア氣の愜鬱が手傳つて悪くするから、第一、心を丈夫に持つて確乎しろ、ハ、ハ、ハ、ハ、君が數年前の勢ひで、かの地獄の上の一足飛び、矢でも鐵砲でも持つて來いといふ得意の横車を曳き出す暢氣さが今こゝに半分もあれば、そんな病氣ぐらゐは絲瓜の皮、のんこの酒アの鼻唄で追ッ拂ふべき筈だがね、さて、さうも行くまいか人生悲惨の極、苦樂十年かの貞婦に死なれた後だもの、いや無理もない、いくら君だつてねエ」

づうぐしさと度胸の太さと惡酒落と横著と才氣をもて汐入村以來こゝに十年の我ま、勝手

に飛び廻りし黒田健次も、今は昔の面影どこへやら消え失せて、瘦せ枯れたる身を我ながら持つて餘しつ、曾ては闇をも貫く物凄き兩眼の瞳子まで、ほつと薄く光輝を失ひぬ、「いや上田、決して僕の事を氣にかけてくれるな、今更だがね、往事を回顧すれば總て夢だ、元來この乃公のやうな奴は旅から旅の旅鴉で、野仆死して街道の並松を肥すべきが當然さ、ところを何の幸ぞ、君が如き過分の友を持つて斯く靜に病痾を養ふなざア、殆ど人間普通の義理に於てあるべからざるの怪、天公の配劑ちと狼狽へてるぜ、第一、君の細君が世間普通の義理一片や口前ばかりの人情一片たア違つて、君が不在中は猶更の事、心の底から溢れいづる同情の涙で懇切に僕を介抱してくれる芳志、まだこれでも聊か残つてる腸に染み渡つて實に感謝の言もないね、嗚呼この良人にして此妻ありたア當坐の世辭でない、この優しき芳志と身を碎いての深切と、また蔭ながら君を思つて念々切々さらに意を安んぜざる貞節を見る毎



に、僕ア泣くよ、思ひ出さずに居られるかい上田、さゝ察してくれ』むゝなるほど、むゝなるほど』この黒田を君、眼前の手下にして、あんな貞女に苦勞さしてやるなよ、残酷だ、悲惨だ、もし僕は一朝こゝに全快して再び舊の壯健になるとも、決して生涯断じて僕ア二度の妻帯しない覺悟だ』馬鹿、知れた事いへ、あの、あれほどの貞婦を貴様、殺して置いて、二度目の妻でも迎へてみる、第一この上田が許すもんか』だからさ、しないといふのさ、この後の生涯断じて無妻と言つたのさ』當然よ、わざ／＼念を押すに及ばないこつた、そんな分りきつた事をいふ手間で養生專一、はやく全快しろ、まだ君には委しく話さないが、この乃公も、いよく今夜から浮世に這ひ出す初陣の首途、そも／＼錢といふものを儲けてみる決心さ』いや、その邊の苦心慘愴は察しないでもない、をり／＼細君がね、心配の餘り僕に言つてる事もあるさ、しかし君、全體どういふこつたね』ハ、ハ、ハ、ハ、さう眞正面から

一文字に問はれちやア聊か逡巡するがね、ちよいと、つまらない、殆ど兒戲に等しい筆はじめ、いろはさ』いろは、にも段々ありでな』その段々も何も構はず、たゞ僕が思つたまゝの眼前、いはゞ途中で物を拾つたも同然、論も仔細も俵置いて、辻占を賣つて見ようと思ふのさ』辻占、辻占たア全體どういふ辻占だ』戀の辻占、あぶり出しの辻占さ、小さい紙の端へ明察で書いて、あぶり出しの文句を賣る辻占のことよ』や、こいつア驚いた』いくら驚いても止めても、すでに志を屈し意を枉けたる論外の僕、もはや決して止めないぞ』いや決して止めもしない、また驚いたは案外の馬鹿らしさに一驚を喫したのぢやアない、實に君が如き高潔な人物でも一度この浮世といふ魔界に對へば、怖しや斯る際どい點にまで意志の作用が行き届くに驚いたのさ、やるべし／＼、むしろ眞面目な糞料簡で癩に解る唐變木を相手にするよりやア、事が手輕くて物が洒落れて居て面白いよ、君の如き大兵肥滿な辻占賣



は古今未曾有の珍だ、その聲で吐鳴り歩くところ實に奇だ、珍と奇は是れ俗物の目を驚かし耳を敬つる所以、我ために耳目すでに集れば我その間に多少の勝を占めたりといふべしだ』  
『ハ、、、、黒田健次いまだ衰へず、どうしても君の口吻だ、こんな事になると身に病痾ありとは思はれない氣煩だね、君でなきやア先づ譽めてくれないこつたね、ところで相談だが、その戀の文句なるものに至つては上田力これ門外漢、さらに分らないんだが』『おい來た、そんな事は僕の得手だ、茶らッほこの駄洒落か何かで戀の奴の鼻頭を扶ッて鼠鳴きさすやうな藝は僕の得たるところだ、よし、その辻占の文句は僕が引き受けた』『ぢやア幸ひ、といふのも情ない業だが、まづ頼むよ』『しかし上田、思やア實に濟まない事ばかりだ、曾ては連れ添ふ貞節の妻に皮も破れし古三味線を抱へて人の軒に立たしめ、今また朋友も朋友、そもく君が如き友に辻占を賣らせて慘憺たる其苦勞を絞取り取るとは、黒田健次よく、罪あるさ』

の深い奴だ、逆も助かるまいぜ、この病氣で』『えッ、がらにもない愚癡をこぼさないで、そろ／＼辻占の文句でも考へろ、しかし、なるべく階下へ知れないやうに、そつと遣ッてくれよ、どうせ分るこつたが、あまり騒がしう聞かせたくないから、明察も白紙も既に用意してあるさ』

其五

そも／＼春の花に浮かれてより、戀も身に染む秋の夜は一入さらに情も深く、三味の音じめの忍び駒、そつと何處へやら繋いで置いて、癡話と口説の四疊半より脱け出でたる二人の姿、今の情怨の中直りに其處ら一邊ぐるりと散歩の體、男は袷の重ね著に庭下駄を履いて鼻唄をうたひつゝ、女も左袂とるが嫌さに其まゝからけての引揚げ帯、をりしも夜は更けたり往來の人はなし、ほッと薄闇の星明りに手を携へて、これが此まゝ添はるゝならばと、互の心中



に祈り合うたる風情、柳橋の上より漕ぎ行く舟の櫓拍子に火影ちらつく大川の流水を見渡し  
 ながら、なほも睦しげに倚り添うて何をか私語く背後に聲あり、大喝一聲、「辻占ッ」  
 きやツと叫びし女の聲もろとも、男も驚いて飛び退きながら振り返れば、編笠に面を包んで  
 見上ぐるばかりの大兵肥満ぬツと仁王立に立はだかりぬ、「辻占を買ひませせんか、戀の辻占、  
 あぶり出しの辻占、辻占ッ」

戀の剛者は得て臆病神の氏子、色香も深く纏れ合うたる二人の鼻頭へ生憎消えかゝる提灯の  
 火をつきつけられて、雲衝くばかりの大男が前に立塞がりながら、辻占と叫ぶ聲さへ耳朶を  
 貫く破鐘聲、をりしも夜は更けて四邊に人はなし、これほどの大男が辻占賣とは不思議の至  
 極、うか／＼謝れば如何なる目や逢ふらむと、背後に隠れて取纏る女を圍ひながら、こゝ  
 が色男の本體、聲さへ震ひ勝に小腰を屈めて、「只今、ちよいと散歩に出たんですから、別

持合はせも御坐いませんが、おい和女、幾分か持つて居ないか、何、巾著に銀貨が少々、ぢ  
 やアそれを上げな、もし、どうか、あるだけで」「むゝあるだけ買ッて下さるか、僕の賣る辻  
 占は一枚が五厘で二枚が一錢、あぶり出して御覽なさい、君のやうな情緒纏綿たる今夜の快  
 を更に一層たすけて言ふべからざるの興を添へますぜ、ハ、ハ、ハ、ハ、」「いえ貴方、その辻占  
 は宜しう御坐いますから」「これは怪しからん、いやしくも今日たゞ錢を貰ふ理由がない、辻  
 占を賣ッて相當の代價を乞ふんです、まづ幾枚あけませうかね」「幾枚でも、思召だけで宜し  
 う御坐います、おい和女、早く出さないかね、何を、ぐ／＼してゐるんだ、早くさ、お手間  
 を取らしちやア悪いよ」「や、こりやア大變な銀貨だ、全體いくらあるんです、何、わからな  
 い、ハ、ハ、ハ、ハ、流石は金を湯水の境涯、この様子ぢやアなか／＼浪費ひますな、そも／＼一  
 家の主人ですか、但しは親が、りですか」「恐れ入ります、どうか、それだけで」「これぢや



ア多過ぎる、こゝにある辻占が、くゞり三十五枚で、六くゞりと七枚、代價にして七十八錢五厘ですが、不意の上客、みんな買つて下さるから七十錢に負けておきます、即ち五十錢銀貨一枚と二十錢貨一枚、残餘は慥に返しますぜ』いひつゝあるだけの辻占を渡して、残る銀貨を其まゝ返すや否、男女は手を引き合せて小走りに遁け行く背後より、おもはぬ嬉しさに我を忘れて猶更の大喝一聲、『ありがたう』またもや聲に驚いて、闇を走せ行く聲音いよいよ高し、

固より斯人を男に持ちて浮世の榮華を願はむ心は夢さら／＼、するほどの苦勞して添ひ遂けるは覺悟の前のみか、同じ苦勞をする上は我身を粉に砕いても今までの潔白男そのまゝの上田力で置きたいが山々、ならば生涯を立て養ひにしたいほどなれど、まだ連れ添うてから日

も浅いに女の出過ぎた振舞と、はやる心を押へて時機を待ちし甲斐もなう、いつしか先驅せられての今更、いかに身過ぎ世過ぎの業とはいへ、あれほど立派な大男に悲しや辻占を賣らして何とする、されど今夜の初陣に破れたらば其まゝ思ひ止らむといひし一言が、せめてのこと、折角の首途を折つて行末ながき氣を腐らせむよりは、必ず仕損じて歸るべき自然の結果を押へての諫言こそと、たゞ獨り吊ランプの下に坐して良人のシャツを繕ふ妻のお清、をり／＼柱時計を見上げては人しれぬ心中の苦痛、ほつと歎息を漏らしぬ、肌寒く次第に更け行く秋の夜の戸を叩く響さへ加はりて、往來の人の聲音も絶え果て、たゞ横町の犬の遠吠えのみ幽に聞ゆる其夜の一時ごろ、門口の戸を叩く音あり、『おい歸つて來たぜ、あけてくれ』

お清はツと飛び立つ思ひ、其まゝ走せ出で、門口の戸を引き開ければ、携へし提灯の火も消



えて眞暗闇に良人の姿、『おや、お歸り、さぞまア、草臥れたこつてせう』『なアに乃公より和女、まだ起きて居つたのか、かまはずに寐ちまへば宜いに』いひつゝ、後ろ手に戸を閉ぢて、まだ霜は置かねど夜露に濡れし編笠を打振りつゝ、裾を拂ひ足を拭うて火鉢の傍に坐すれば、はや埋火を掻き起して用意の小鍋立に茶よりも先づ酒の爛、ふんと鼻を衝く香氣に上田おもはず笑を浮べながら、『多謝、多謝、たとひ嚴寒の夜を冒して赤裸で稼ぎ通すとも、家に歸つて最愛の妻が斯くの如くンば人生の快だ、何をか羨み何をか歎かむ、ハ、ハ、ハ、』さも心地よけに聲をあけて笑ふ體、さては仕損じて歸りしにもあらざるか、わざと負け惜しみを張り抜いての高笑ひでもないかと、お清そのまゝ、小膝を進めて盃を渡しながら、『どうで御坐いましたの』『いや頗る閉口したね、なか／＼和女、急に吐鳴れるもンぢやアないよ、たとひ鬼神を喝破するの勇ありと雖も、びらりしやらりと白粉くさい色町の中央で、そも／＼御本人が

乃公だ、かよふ千鳥の秘の辻占などゝ氣恥かしい、眞面目な聲が出るもンかね、實ア幾度も中途から遁けて歸つて、和女の面前で兜を脱がうかと思つたがね、さて暫時こゝが浮世の初陣と勇氣一番、思ひきつて叫んだ結果が和女、妙なものだね、家から持つて出た辻占一枚も残さず、得たるところの代價こゝに七十錢』いひつゝ、懷中を探つて五十錢と二十錢の銀貨二枚ころりと投げ出しぬ、『この分ぢやア、少し勉強して一夜に一二圓を取るこたア易々たる業さ、』少くとも月に三十圓は河童の尻だ』

お清あまりの意外に驚いて呆れたるまゝ、良人の顔を打守りしが、ふと心付いて見れば、わづか五厘一錢の辻占に銅貨一枚もなくて、たゞ五十錢と二十錢の銀貨ばかり二個とは不思議の至極、『良人、そりやア眞實ですが、全く辻占を賣つて、それだけの、お錢を』『眞實さ、虚言を吐いて何にするものか、實際、持つて出た辻占を賣り盡して七十錢、しかも其うち幾分



が負けてやッて七十銭だ、もし當然に取りやア八十銭近うなる筈だッたが』「おや、さうですか、ちやア良人、どツかで取替へて歸ッたんですな』「いや、何故』「だッて良人、五厘一銭の辻占を賣るのに、さう銀貨二個と纏る理由が御坐いませんもの』「ハ、、、なるほど、乃公が悪かつた、そりやア其筈の理由がある、實ア斯うだよ』

手に持てる盃ぐツと飲み乾しながら、柳橋の上にてありし男女の事を語れば、お清おもはず吹き出して、『でせうよ、そんな事でもなくッては良人、あんまり初めての手際が善過ぎて、どうも不思議ですもの、ホ、、、しかし可哀さうに、そりやア辻占を買ッたのぢやない、不意に吐鳴りつけた良人の聲に驚いて振り返る途端、また薄闇を貫く良人の大兵に驚愕して、軽く見たところが破戸漢壯士の強請か、もし重く見れば追剥か辻強盜にでも出喰はした心持で、いはゞ生命からぐ、抛け出して往ッたのですよ、ことに依ると後で交番所へ届けたかも知

れませんよ』「や、畜生め、けしからん男女だな』「此方が良人、けしからん奴に見られたのですよ、第一その體軀と其地聲で戀の辻占賣は逆も無効です、折角の思ひ立ですが、今夜のやうに一聲で七十銭の代價は二度とありませんから、もう止めて下さい、わざ／＼立派な大の男が人の寐る時分に作り聲を張り上げて歩かずとも、まだ外に何か面白い工夫がありますよ、もし假令、無いにしたところが、まんざら今日明日のうちに飢ゑて死ぬでもなし、こゝは兎も角、當分この妾に任して置いて』「いや、さういへば猶更、今夜の事は先づ論外として、翌日、もう一夜を試してみたい、いよく翌日の夜が不可きやア、其時こそ方針を更めるから』「よろしい、ちやア翌日の夜の結果で、きツと妾の言ふことを、お聞きなさいませぬ』「きく、きくさ、しかし、この七十銭、そも／＼これを上田力が生來こゝに始めて浮世から儲けた錢と思やア、何だか乙なもんだな』「ホ、、、儲けたのなら宜しいが、威嚇して取ッたんで



すもの』むなるほど、さういへば、さうかねエ』ですとも、誰が良人の辻占なぞを買ひますものかね』『さやうか』『第一あの黒田さんも随分いたづらな方だよ、妾の心配してる事を御存じで居ながら、病人の癖に、餘計な智慧を付けてさ、辻占の文句を作ったり書いたり手傳ツたり』

折しも二階の黒田健次いまだ睡らで耳を欬てけむ、そろく寢床を這ひ出して段梯子の口より階下を差覗きながら、病痾に勞れし皺枯れ聲、『おい上田、あやまつてくれよ、細君に謝してくれツてば、おい、第一、君が不可よ、折角の初陣に遣り損ツて來るからさ』

お清じろりと見上げて『おや黒田さん、まだ起きて在らツしやるの、御一所に何か召上ツたら如何です』『いやもう決して、それには及びません、細君、實ア僕が悪かつたのですから、さう上田を、いちめないやうにね、おい上田、目ばかり剝いて居すに何とか御機嫌を取れよ』

『憚りさまです、黒田さんは流石は御苦勞人、しかし良人はね、これくらゐで宜しいの、ホ、ホ、ホ、』『や、いよく以て恐縮々々』

もし外の者ならば忽ち議論風生、さらに屈せざる男なれど、現在おのれが連れ添ふ最愛の妻に一本ぐつとまゐられて聊か閉口しながら、なほいまだ止めざる二日目の夜に入るや否、例の編笠に面を包み戀の辻占と白字に染めぬいたる紅提灯を携へて、二十貫目の大兵のそくと歩み出しぬ、

柳橋は手近なれど、もし前夜の男女に出逢は、面倒なりと、さらに轉じて新橋烏森の二個所を目的とし、はや時の汐合を圖ツて戀の湊の出舟入舟を覗ひつゝ、家々の軒端に吊せし御神燈の影より香粉の通ふところ、二階三階の畫樓廉内に色絲の鳴り響くところ、さては船板塀



の待合に何とやら私語喃々の笑聲漏るゝところ、いづれも化生の棲家を望んで勇氣を鼓しつ  
つ、『辻占ツ、戀の辻占、辻占ツ』

聲に驚いて二階の障子を引き開け門口の格子戸より走せ出で、見るものはあれども、たれ一人の呼び止めて辻占を買はむするものなく、およそ一時間ばかり叫びつゞけて更に何の甲斐もなき立腹まぎれ、ますく大聲を張り上げれば、いよく驚き恐れて近づかず、『戀の辻占おもしろい辻占、一枚が五厘で二枚が一錢の辻占々々』

さらぬも大男の大跨にて廣からぬ烏森と新橋の間、はや同じ道を二三度目には、世間普通に飛び抜けたる破鐘聲を聞き覚えてや、ほつと餘光を漏らす江市屋格子の内に女の私語く聲、低けれど癩走つて手に取るが如し、『あれ、今の馬鹿聲がまた呻つて來たよ、ちよいと買つて見ようかねエ』『およしよ、馬鹿なら宜いが、ありやア、きつと狂氣だよ』『道理で先刻、そ

つと覗いて見て驚いたよ、まるで仁王様の出來損ひ』『なアに馬鹿でも狂氣でもないさ、あんな奴には得て盗賊のあるもの、あゝして辻占を賣りながら家の様子を考へるんだよ、人並すぐれた圖體、定めし力量もあるだらうから車力でも何でも分相應の事をすれば宜いに、不料簡な奴は何處までも不料簡で、今に御覽、こゝ五日とは續かないよ、どうせ其うち、どツかで縛つて牢に打ち込まれるから』『だつて、あれでも人間のうちだから、お金でも澤山持つてお客様になりたからうねエ』『初心な事をお言ひでないよ、いくら化けて身を飾つたつて無効第一あんな奴の目付が違つてるから此方で受付けないさ、目付といやア穢多かも知れないよ穢多といふものは、天生つうくしくつて太い奴だから、取るものが無いと其處らの下駄でも何でも、ちよいと引つ攫つて行くよ、用心おし』『こんど吐鳴めて通つたら、鹽花でも頭上からぶツかけてやりたいね、延喜でもない、汚れるわ』



何心なく歩を停めて斯くと聞いたる上田力、くわツと憤怒の心頭に編笠ゆらめくや否、おもはず躍りあがって格子戸蹴破り雑言過言の女原いちく踏み殺してくれむかと思ひしが、いやまで、とるにも足らぬ賤しき賣女風情が世迷言、しかも現在の我こゝに今この姿を何とせむ、あゝ已ぬるかなと其まゝ二三間を忍び足に行き過ぎし横合の小路より、どやくくと立現れし荒男四五人、『やい、うぬア全體なんだ、とんな地聲を張り上げやアがって唐變木め、この土地で鐙一文でも稼がうと思やア、するだけのところへ爲るだけの挨拶しる河童野郎め、はやく出る、うかく、長居すると横ッ面に繩を通して引す張り廻すぞ土左衛門め』ハ、ハ、ハ、ハ、唐變木に河童野郎に土左衛門か』や、こん畜生、ふざけた奴だ、なぐツちまへ』それといふや否、四五人どつと一時に前後左右より飛び掛りしが、さらぬも天生の大力、まして悲憤の腕節張り切つたる折柄、おツと喚いて水車の如く兩の拳を振り廻せば、地響き打ッ

て仆る、中より躍り越えて一文字に遁け出しぬ、

烏森と新橋の間を三四度ぐるぐ、およそ五時間ばかり叫び廻つて一枚の辻占も賣れざるのみか、どこの馬の骨とも牛の骨とも知れざる不見轉藝者の口の端にかゝつて、あらゆる冷罵嘲弄に逢ひながら、我身の風俗を顧みて其面に唾さへ得かけず、そツと拔足して過ぎ行かむとする横合より、また四五人の下種に取巻かれて忽ち降り來る拳の雨、いちく蹴飛ばして走せ去りしかど、おもへば無念心外、たとひ三度の食を減ずるとも白日青天の下に横行闊歩せば堂々たる偉丈夫の我、さるを背闇に紛れて斯る體なればこそ徒らに鼠輩の恥辱をうく、もはや再び取るべき業ならずと、持てる提灯も辻占も其まゝ途上に投げ棄て、舌鼓うちながら、やうく我家に近づきしが、さて妻の手前お清に對うて何といふべき、前夜に引き代へ



今夜の始末と、我を忘れて停む背後の闇中より、「良人まア早い足ですことね、妾は一所懸命、せつくと息を切りましたよ、あゝ苦しかったこと」「や、和女、清ぢやないか、今ごろ、どこへ何しに往ったのだ」「何處ツて、良人が家を出ると直、あとをつけて見えがくれに、しかし先刻の騒ぎに、お怪我は御坐いませなんだの、妾は驚愕して、どうしようかと思ひましたよ」「むゝさうか、乃公の後を、今まで和女が、つけて居たのかい」「前から用意して置いて、良人が出ると其まゝ門戸を閉めて裏口から飛び出しましたの、しかし良人どうです、今夜一枚も賣れますまい、あれだけの間たゞの一枚も賣れませんでせう」「なるほど、いよいよ降参した、もはや和女に對つて一言もない、何とも申譯のないこつた」「さう得心さへなされば、それで結構、さア早く家へ歸つて、また一盃ぐつと召上がれよ、その用意も出がけに仕て置きましたから」

其六

浮世といふ奴、これほどの手剛いものとも思はざりしに、さすがの上田も案に相違しての敗北、まして我を思ふのあまり氣を揉み抜いて座にも得堪へず、そつと見えがくれに薄闇の影を追うて附添ひ來りし妻の手前、いよく面目なくて其夜は其まゝ無言に打臥せしが、いつにない事、曉の鴉も雀の聲も聞き流して旭光すでに枕頭へ射し入れども、なほ起き出でず、頭上より夜著ひつかぶつて物に懼れし龜の子に似たり、  
いかに岩乗の體軀とはいへ、さては此ほどよりの草臥に身も心も勞れ果て、我を忘るゝばかりに寐込みしかと、お清そのまゝ打捨て、物音さへ靜に立働きしが、八時九時十時、はや十一時になれども目の覺めぬ體、いつしか晝飯の用意も整ひて十二時に近づきしかば、しづかに枕頭へ立寄つて微笑を浮べながら、「ねエ良人、もう正午ですよ、さア御飯を召上つて、ま



た寐るなら寐るとなさいよ、あんまりお腹が空いちやア毒ですから、ねエ良人、よう』いへども更に聲なければ、おもはず眉を擧めて夜著の襟そツと持ち上げつゝ、差覗けば、巖窟の奥の燈明に等しき兩眼ぎろくゝ光らせながら、上田先生なほ無言の體、『あらまア、どうなすつたの、そんな大きな目を開いて居ながら、ちツとも返事なさないでさ、さア良人、正午ですよ』『いや、恐縮、恐縮』『戲談ぢやア御坐いませんよ、何だつて良人』『いやさ恐れ入りました』『ホ、、、、何が、そんなに恐れ入つたんです』『敗軍の將、兵を語らずと雖も、實はね、川上夫婦や和女に對つて、あんまり立派な大きい口を聞いてさ、いやしくも男兒が意を決して身を大俗に投ずるの結果、乞ふ見よとばかりに出は出たもの、儲あのだまだ、大の男が足を播種にして十日間この東京市中を駈け廻つた甲斐もなう、まんまと首尾よく遣り損ねて斯くの始末、あゝ、逆も乃公は無効だ、始めて知る世路の難きを、それも最初の夜

に得た七十錢を和女に笑はれた時、その意見を用ゐて止せば宜かつたに、なほ糞強情を張り抜いて二日目の前夜、しかも和女に後をつけられてさ、一錢一厘は儲遣き、すべた藝者の口の端に罵られ端奴に取巻かれて、はふくの體で遁け歸つた前夜の今朝、いくら何だつて和女、まじめな面をして朝飯の膳に對へるかい、いやもう閉口頓首再拜、しかしながら』『それ良人、その、しかしながらといふのが、どうかすると事の間違ひですよ、しかしながらと仰しやるからは、また何か外に分別をなさる決心でせう』『いやはや、さう手厳しう斫り込まれては、いよく、以て乃公の立場がない、働き場所がなくなるからさ』『立場がなくつて結構、働き場所のないのが却つて良人のためです、こゝ、暫時は何にもなさらないで、じツとして在らツしやい』『だつて和女このまゝ、じツとして居ちやア、第一、家を構へ妻を持ち將に子もあらむとする男が、しかも、わづか一敗に驚いて』『だつて和女も妾もありやアしません、じ







宙に藻掻きながら『御免下さい、御免下さい』

其七

うまれて物の怖しさと悲しさを知らず、まして身は金鐵の自慢たらふ鼻うごめかして、醫者と病痾と涙は大禁物、飛ぶといは、人の家庫ひつさらうて地獄の釜の一足飛びも演ずべく喰ふといは、鬼でも蛇でも茶漬の菜に搔ッ込んで舌鼓うつほどの黒田健次なりしが、一朝ここに飛び損ね喰ひはぐれ宿昔青雲の志を失うてよりは、どツと一時に押し寄せ来りし浮世の不運身は忽ち病痾に臥して一歩も叶はぬのみか、幸ひ自己に過ぎたる貞女のお鳥あればこそ、暫時は其古三味線の小唄に養はれしかど、またもや頼む樹下に雨漏りて、あとに取残されたる病みほうけの瘦せ男一疋、腐った魚の腸は田の肥料になり破れた反故は紙屑買の手に渡れど人間の半死半生は鏝一文の代價もなければ、こゝに始めて泣きも泣いたり涙の瀧津

瀬、其ま、泣死せむとせしを、やうく上田に助けられて餘命を繋ぐ今の心が、せめて三年前にあるならばと、今更ら迎も及ばぬ事を繰り返して獨り枕を敬てぬ、をりしも階下より上り來しは當家の大黒柱お清の方、小鍋の白粥に鶏卵の半熟と焼鹽とを持ち添へて、しづかに枕頭へ差寄りながら、『黒田さん、今日は大分お顔の色が宜しいやうですことね、ちと早過ぎますが、少し都合が御坐いますから、さア夕飯にして下さい、ソツプも差上げたいんですが、明朝にしていたゞきたいの』『や、ありがたう、いろくさう氣をつけて貰つちやア却つて恐縮だ、なアに、もう死ぬ氣遣ひはないですよ、犬殺しに一撃ぐわんといはされた洋犬と一般、もし急所に當れば其ま、幸ひに外れた後が長びくんですから、喰へるものさへ喰はしていたゞけば自然に快くなりますさ、また御都合で、どツかへ出なさるなら構はないで、夕飯なぞア夜に入つてからでも宜いんです、全體どこへ往らッしやる、



今日は朝から上田も不在な筈ですが』「おや、階下に居た妻さへ、いつの間に抜けて出たか知らないに、貴君よく二階に寐て居て御存じなのね』「しまった』「おや、いよくをかしい、しまつたとは何を、何の事です、は、ア貴君また何か相談に乗りましたね、智慧を附けましたね』「いや決して、なかく以て、辻占の一件に懲りてからア猶更ら謹慎、お怨恨が忽ち身に報う今の境涯ですもの、爾來さやうな、けしからん事は』「うそ、虚言を仰しやい、そんな柔かな術を喰ふ女と思つて在らつしやるの、あてが違ひますよ、さア眞直に白狀なさい』「白狀つて、別に白狀する事が』「ないもんですか、屹度あるに相違なしの中央を見抜いて居ますさ、辻占の一件で、きのふ一日あれほど、おとなしう家に居ましたから、まづ安心だと思つて裏口で洗濯して朝の間に、また何處へ飛び出したまゝ、もう貴君、今日の夕方せう、あの良人のこつてすから、さう一日も長居する知音の家はなし、もしあれば濱町一軒、これ

から一走り、ちよいと往つて見ようと思つて居ましたところ、妾に問ひ落されて、しまつたと仰しやつた今の口振目付顔色、てつきり一つ穴の狐、同類でせう、それとも全く御存じない事なら、失禮千萬な女の癖に、疑つた妻が萬々すみませんから、この場で低頭平身して貴君に、おわび致します、致しますがね黒田さん、もしも後で同類一件が露顯れたら、それこそ、きゝませんよ、いくら言譯なすつたつて、無効ですよ、よろしいか、別に證據も御坐いませんが、しつかり念を押して置きますよ』  
五分も隙さぬお清が目色、じつと黒田の顔を見詰めながら、しづかに居坐を直して兩手を疊に頭を下けむとすれば、流石の黒田も一期の浮沈、はつと驚いて思はず病みほうけたる身を蛇の如くに這ひ出でつゝ、お清の手首しかと握りぬ、眞平、眞平、ひらに此方から謝罪ります、ど、何卒この、此お手を上げて下さい』「それ御覽なさい、貴君も随分お人が悪いよ、病



氣で身體は細くなつて在らツしやるが太い方だよ』や、驚いた、こりやア驚いた、實に閉口しました、謹んで白状いたします、もはや已むを得ない』何が已むを得ないモンですか、ちと已むを得るやうな事をなさい』いやもう何と申されても一言なし、しかし細君、決して、この黒田が決して謀主でも何でも無い、また智慧を付けるツて、つける智慧がありますモンか、たゞ上田に相談しかけられたから、なるほど、それも宜からう、ぐらゐの程度で』それも宜からうといふのは、全體どういふ事です』只今、申し上げます、あゝ苦しい、貴女がね、あやまると言つて居坐を直された時、ぎよツとして思はず夜著を這ひ出した故か、この胸邊が、まだ病身だから、はツと思つた胸の動悸が』おや、それはまアお氣の毒さま、お茶か湯でも差上げませう』いや恐れ入ります、それには及びません、しかし細君、貴女アなか／＼うまいモンですな、天晴れ女丈夫、迎も上田が叫はない筈だ』今更ら木に竹を織いだ

やうな空世辭を止してさ、早く聞かして下さい、良人の飛び出した理由を』なアに、さう深い仔細も何もないンですがね、實ア今朝ちよいと二階へ来て、きのふ貴女に言ひ聞かされた段々、勿論、上田のこつてすから、殆ど半分は嬉し泣きに泣きながらの談話ですよ、なるほど妻の言ふところは理もあり貞もあり事實にも適ツて有難いは有難いが、もし餘り苦勞させ過ぎて身にでも觸ツちやア取返しがならないから、迎も無効として、も一度、乃公が何か衣食の道を探し出しに行く決心さ、しかし妻に言ツちやア引き留められるから、そツと今このまゝで出る、出るに就いては後を貴様に頼む、妻が心配せぬやう、うまく言ツてくれと』ホ、ホ、それなら貴君、別段この妾に秘して狼狽へるにも及ばんぢやア御坐いませんか』ハ、ハ、今になつて見りやア、さうですがね、あんまり唐突に手厳しい不意討を喰ツて、どういふモンか其間に言ひそゞく来て仕舞ツたのです、これくらゐの事で狼狽へる黒田でもな



かッタンですが、やはり病氣の故ですかなア』『いえ病氣ばかりぢやア御坐いません、やッは、  
り貴君が悪いの、いくらか良人へ智慧を付けた覚えがあるからです、しかし、いつごろ歸る  
と言ひましたね』『さ、そだて、そこが少々ね、申し上げかねるところで』『それ、今いッた  
通り、そろく貴君の困る事が出て来ませう』『いや別に困る事も、しかし、かういふんです、  
前の十日の例もあるから、毎日々々家へ歸ッて来ちやア堪らないし、逆も二日目から出して  
くれないから、いッそ思ひきッて五日間、五日の間は木賃宿へでも泊り込んで一所懸命に探  
し歩く、もし五日間に何の功もなくば、其時こそ貴様も一所に謝ッてくれと、まつ斯うい  
ふ約束で』『おや、さうですか、五日間そのまゝ歸らないッて、さうですか、まア何といふ良  
人でせうね、きのふ妾が、あれほど事理を分けて頼むやうに言ッたものを』『いや、その段は  
上田が重々恐れ入ッて半泣きに感謝してゐるんです、しかし心に嬉し泣きの涙あれば、あるほ

ど猶更ら以て悠々として居られない、そこが即ち上田の上田たる所以で、もし僕なら、こいつ  
ア面白い鼻アを持ち當てたと其まゝ直に懐手の鼻唄か何ぞで、ぶらく遊び出すんですが  
ね、あの上田は天生あの通りの好漢、その可憐さを貴女も汲み取ッて、どうかね、五日の後  
すごく歸ッて来ても頭上から吐らないやうに』『黒田さん、良人を吐りつける妻があります  
か』『や、失敬々々、過言の至極、つい言葉が誤ッたのですから、しかし事實は只今の』『い  
え、よく分ッて居ります、居りますがね黒田さん、ちよいと貴君、其時さう仰しやッて下さ  
れば宜いに、さうすりやア、あの良人に五日間また無駄な苦勞もさせず、何とか心持よく引  
き留める方便も御坐いましたもの、しかし過ぎ去ッた事ですから、こりやア御不足を申し上  
げるんでないの、たゞ妾の愚癡を並べたばかり、ね黒田さん、ホ、、、、』『何だか妙に、  
薄氣味の悪い笑ひやうですな』『おや何故、氣味がお悪いの』『いや、どうも、これは重ね重



ねの失敗』『時に黒田さん、もう此上は良人を諫言するのに口舌では致しません決心、その五日の間に妾は妾だけの料簡で、ついでに貴君に看板を書いていたゞきたいの、良人の相談に乗った貴君ですから、また妾の相談にも乗って下さるでせうね』『しかし、それぢやア内股膏薬で、僕が何だか上田を出し抜くやうに當るこつちやアないんですか』『そりやア、さうなりません、しかし貴君お嫌ですか』『いや何、別に嫌とも』『ぢやア書いて下さい、ね、きつと頼みますよ、ありがたう今から御禮を申して置きます』

なるほど顔は焼跡の金糞なれど心は磨きぬいたる名玉、妾は泥田を泳ぐ家鴨に似たれど氣は松上の鶴に等しき女ぞと、さすがの黒田健次も感に堪へし其翌日より、俄に人の出入り繁く果は丁々と鑿の音さへ聞えしかば、おもはず肩を擧めて寢床を這ひ出でつゝ、二階の降口

に伏して階下を差覗けば、いつの間は何として用意しけむ、大工と手傳ひ四五人が向鉢巻の大働き、お清は襷袢手に四邊を見廻して頻りに普請の指圖しながら、まづ門口の格子戸ぶちぬいて商賣の店を開かむとする體に、黒田いよく驚き呆れて舌を巻きぬ、

もう此上は口前ばかりの諫言するより、五日の間に妾は妾だけの料簡ありと言ひしは昨日の夕方、その舌の根の乾かぬ今日はやこゝに斯くの體、氣の利いたる男とて斯うも鋭く立廻らぬ浮世に、さてもゞ天晴の女、なるほど身は下女風情より出でたれど凡俗に用なき上田を承知で連れ添ひしだけの女なりけりと、今更ら首を縮めて恐れ入りぬ、

普請の始まりし日より三度の食を運ぶにも、お清さらに二階へ上り來ず、たゞ首と手のみ梯子段に現しながら、黒田さん忙しいから御免なさいといふや否、忽然と降り行く體に、どうして何日から何をすると問ふ違なく、たゞ顔みらるゝさへ面目なき心地して打過ぎし



が、三日目の正午ごろ、やうく枕頭に近づき来りて微笑を浮かべながら、「この兩三日は大變に失禮ばかり致しました、さぞ騒がしう御坐いましたらう、しかし、どうか斯うか形容だけの普請も出来上りまして、明日から小賣店を出さうと思つて居ますの、つきましては、お約束ですから御病中なほさら恐れ入りますが、この看板を書いて下さいな、看板は三枚ですよ、一枚は煙草の小賣店で、一枚は齒磨やら楊枝やら石鹼やら其外いろくの雑とした日用品の小間物類、も一枚は著類の仕立物をする看板ですから、其お心算で都合よく一目に誰でも直ぐ分るやうに願ひます」いひつゝ、四尺長二枚と一尺ばかりの檜板一枚に、はや墨磨り込みし硯と筆を添へて差出せば、健次たゞ無言に起き直つて閉口頓首の體、「あれ、お嫌なんですか」  
 『決して、さらくさやうな義でなし、どうも實に、全く貴女にやア驚きました、もはや何とも申しません、恐れ入りました、恐縮々々』  
 『何ですよ黒田さん、戯談は儲おいて、どう

か早く』  
 『さらぬだに病後の拙筆ですが、うろく狼狽へて阿しな卑下をする場合でないから、たゞ命これ従ふのみ、謹んで書きます、書きますがね細君、上田が歸つたら、さぞ驚愕しませうな、その呆れて驚いた顔が今から見ると、いかにも可哀さうです』  
 『何が貴君、萬事あの良人のためです』  
 『ですから別に貴女がお悪いといふんぢやアない、たゞ上田が可哀さうだと』  
 『さう貴君のやうに、ぐづぐづ文句を仰しやるなら、もう頼みません』  
 『や、細君、そりやア貴女、いえさ、書きますよ、書きますとも、只今すぐ、しかし驚いた、いかにも恐縮、上田のみか、この黒田の如きも今更ら往事を回顧すれば半文の價値なし、あゝ無効だ、慚愧々々』

上田が立出でしより今日は五日目と、黒田健次おのが身の病を忘れて寢床を這ひ出でつゝ、



をりく二階の窓に首さし出しながら、しきりに往來を打眺めて今や歸るか、今かノと其日の正午過ぎまで待ちしが、さらに影なし、さては必定また五日間の無駄骨に終りしか、十日間この四里四方を駆け廻つて艱難辛苦の果が辻占賣しかも只の一枚さへ得賣らぬ上田が腕としては、よしや血眼になつて立駈けばとてよしや如何なる業を見付け出せしにせよ、逆も覺束なき浮世の浪風に對うての舵柄やうく、生命からく、漕ぎ戻るや否、俄に變り果てたる我家の軒端に、あつと呆れて嘸や驚かむ、あの二十貫目の大兵すく、洞れ返りて妻への口上、おもへば哀れなりと、また這ひ出でて窓よの差覗けば、をりしも彼方より歩る來る上田が姿ちらと見えぬ、かくとも知らぬ上田先生、あはれや五日間の砂埃塵に塗れて駈け廻りし甲斐もなく、木賃宿の夢さへ安からざりし苦心も水の泡と消え果て、残るは五體の疲勞と心の面目なさ、無宿

の乞食小僧も朝の一時に一日の饑餓を凌ぐと聞き及ぶ世の中を、世間なみくくに勝れし大の男が五日目の今更ら此まゝ家に歸りて何とやいはむ、あれほど事を分け理を押しして諫めし妻が手前、どの面さけて門の闕を越えむかと、流石に平生の悠悠寛々たる勢ひもなく、たゞ悄然として歩み來りしが、ふと見れば今までの格子戸半窓がらりと打抜いて、おもひもよらぬ煙草の小賣店、さては日用の小間物類を飾り立てたる體に、もしや門違ひかと思へども正しく我家、さりとて俄に斯くなるべき筈はなし、夢か今は白晝、うつゝか我こゝにありと、兩眼の瞳子を定めて猶よく見れば、新しき看板に見覚えのある黒田の筆跡、品々を書き並べたる其下に「上田きよ」はつと驚き呆れて身を潜めつゝ、足を爪立て、差覗けば、店の小影に妻のお清が姿、ちらと見ゆるや否、また忽然ぎよつと震ひあがつて、一二間おもはず遁け出しぬ、



二階の窓より斯くと見たる黒田は頻りに首さし伸べて手を振りつゝ、委細かまはず其まゝす  
ツと這入れ、萬事は乃公の胸に一策、もし山の神の荒れ模様あれば祈り静める工夫もありと  
口には言ひたけれど聲を出さば忽ち階下への露顯、たゞ氣ばかり揉んで焦慮りしが、ふと思  
ひついて土瓶の水を屋根に流せば、たら〜と軒端より落ち落ちる雫の音に上田おもはず見上  
ぐる顔と顔、互に目と手を動して啞の争ふが如し、

お清は店の小影に坐しながら、片手間の針仕事に餘念なかりしが、時ならぬに軒より落つる  
雫の音、はて不思議と身を起して何心なく外方を見れば、かくとも知らぬ良人が隣屋の軒下  
に立って頻りに打仰ぎつゝ、手を振り首を振る體、さてはと今更に呵しく、吹き出さむとせし  
を奥歯に咬み殺して、其まゝ内に入り二階の梯子口より聲高く、「黒田さん、ちよいと急用で  
横町まで往つて來ますから、御病中お氣の毒ですが、どうかね、そろツと降りて店番をし

て下さいな』きくや否、黒田は得たりと思はず横手を拍ちしが、はツと心付いて俄の咳に紛  
しながら、「や、心得た、承知しました、今すぐに降ります、大丈夫、すぐに降りますよ」お  
清、わざと良人の方を見返りもせず、すツと其まゝ立出で、四軒目の横町へ曲りし姿を、  
黒田やう〜見送りて此方を振り向けば、なほ上田は二階の窓を仰いで我を待つ體、「おい上  
田、僕は此處だよ、はやく這入れ、何、細君か、そりやア今それ、その横町まで出掛けて往  
つたから、この間に早くさ』畜生、虚言をいへ、つい今まで、その店頭に住つたちやアない  
か』「ハ、、、君は二階ばかりに氣を取られて居つたからだ、ちよいと用があるツて、僕  
に店番を仰せ付けられて今そこへ出たばかりさ』

上田かくと聞くや否、さては此機を失ふべからずと、其まゝ走り込んで今更ら四邊を見廻し  
ながら、ほツと太息ついて目を圓くし、「おい黒田、實に桑田碧海の世諺、浦島太郎の里歸り



と一般だ、こりやア全體どうしたんだ』『どうしたも斯うしたもあるもんか、君の鼻アは大變な女だぜ、全く軍師だぜ、逆も無効だ、兜を脱いで禪門に降参すべし、以來たゞ命これ從うてさへ居りやア天下泰平、つまり女帝國だよ、野郎みだりに謀反を起しちやア却つて今日のやうな目に逢ふからね、たゞ日夜の奉公專一、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし驚いたらう』『驚かずに居られるかい、僅五日の間に、まさか斯うたア夢にも、實に案外の一驚を喫したな』『して君が五日間の結果は』『さ、それが面白けりやア、また斯うも驚かないがね、失敗々々また失敗、や、お談話にならないから、さらぬだに戦々競々たる今更、妻の手前どうもね』『しかし君、安心するが宜い、これほどの腕があつても亭主を尻に敷く市井一般の山の神とは違つて、感心な女よ、念々さらに君を忘れず君を怨まず、郎や今いづくにあると五日間たゞ嬰兒の母を慕ふが如き體、しかし、なさけない事にやア、それだけの怨恨が僕の方へ眞一文字に

ぶツか、ツて来るさ、いや君の相談に乗りながら黙つて居たとか、いや餘計な智慧をつけたとか、病人の癖に生意氣な婆婆ツ氣を出すとか、第一これほど世話になりながら無斷で君を出したといふのが御意に觸つてね、それも頭上から噛み付くやうな世帯鼻アなら臨機應變うまく綾なしもするがね、そこは僕の長所短所を丸呑み込みの女丈夫と來て居るから、殆ど始末に終へない、時には近く寄つて眞綿で首を絞められ、時には遠く遠箒を焚いて蒸し立てられる苦しさ切なさ、そればかりか君、この五日間は三度の食事も別して御丁寧な御馳走でさ、いやもう流石の横著野郎も殆ど、まるつて仕舞つたよ、君が家外で五日間の苦勞より、よほど酷かつたぜ、日夜お傍に引付けられての水責め火責め、ハ、ハ、ハ、ハ、』

をりしも隣屋の婆に何をか挨拶の聲は正しくお清の歸り來りし體、それといふ間もなく、はツと驚いて思はず二階へ駆け上りし上田の體、今更ら聲たて、呼び下しもならぬ面前へ、は



やお清が姿あらはれて、『黒田さん、御苦勞さま、さア二階で、お憩み下さい』

上田奴こゝに此まゝ居れば却つて事の易きを、あまり正直に狼狽へすぎて遁け上つたる今更、黒田も調子外れて其まゝ無言に二階へ上り行きつゝ、まづ梯子段より首差伸べて見れば梟の如き目を圓くして片隅に身を縮めたる上田の顔色、しきりに手を振り聲を潜めて、『おい黒田、いよゝゝ歸つて来たな』來たさ、來たつて君、あのまゝ平氣で居れば宜いに、却つて都合が悪いよ』『だつて、何だか變だ、妙に驚いてね、我しらすさ』『第一に僕が困るよ、また不在中に君を二階へ上げて置いたと、いはれるのが辛いさ』『しかし黒田、降りて往つて何とか挨拶してくれよ』『するさ、どうせ、せずにやア居られんこつたがね、あんまり工合が呵しいよ、何だか出しぬいて拵へたやうで』

をりしも階下よりお清の聲、『おや黒田さん、貴君のお客様ですか、ほしやくゝ二階の談話聲

は』南無三寶、それ見ろといはぬばかりに上田を睨みつけて、そのまゝ梯子の降口に例の如く這ひ出しながら、『いや、僕の客ぢやア御坐いませんが、實は細君、貴女の、大切な、お客様でね』『妾の客、誰のこつてす、いつの間に二階へ、なるほど脱ぎ捨て、ある下駄に見覚えのない事も御坐いませんがね、ちよいと今、思ひ出せませんの、全體、何といふ名前の人です』『こりやア恐れ入りましたな、その姓名の義は、ですがね細君、下駄に見覚えがあると仰しやれば、まさか知らない他人の間柄でも御坐いますまいから、どうか其邊は、お手柔かに寛大の處置を願へませんか、たゞの奴なら僕が掴み下して御面前へ出る筈ですがね、何を申すも世間並を外れた大變な重荷で、二十貫といやア逆も病人の僕が力で叫びませんから、おい上田、こゝだ、こゝだ、もう斯うなりやア君の領分だ、はやく現れて直談判をしるよ』

上田も今は絶體絶命、やうゝ片隅より這ひ出でて黒田と共に面を並べながら、しきりに階



下を差覗いて、『おい、乃公だよ、御免下さい、この乃公だよ、御免なさい』『乃公だく、では分りません、また御免々々と何を謝ッて在らッしやるの』『困るなア、もう降参したからどうか無事に下してくれよ』『さやう、その聲も聞き覚えのあるやうですわ』『貴女さまの御厄介になッて居ります奴で、上田力と申す馬鹿野郎、實際、はや何とも申譯のない、けしからん奴なんで』

其八

かねて川上の妻女より貰ひうけたる金の效驗この時なりと、お清その金を携へて眞一文字に濱町へ駈け込めば、川上夫婦も手を拍ッて膝を乗り出しつゝ、得たりかしこし上田を諒めて黒田の鼻柱へし折るべき好機會ぞと、俄に出入の煙草屋を呼び寄せ横町の小間物屋に人を馳せて、もし萬一の事あらば當家で引き受けむとの一言に、浮世と金は廻り持ちの諺、さらば

品物の賣上げ次第にて支拂ふべき約束を固め、例の金は其ま、持ッて歸りて居の小普請に費ひしのみ、なほ半分以上はお清の懐中に残りて三月越しの用意、たとひ一品を賣らずとも俄に落城せぬ計算あれば、どこまでも平氣に濟まし込んだる妻が顔色を、見るにつけ思ふにつけて上田が不思議さ訝しさ、いかに首を捻ぢ曲けても更に手品の種を見出し難し、下女とはいへ濱町の臺所一切を引き受けて七年越しの臍繰金、身分不相應にありしかど、そもく新婚旅行を洒落れ過ぎて出雲三界まで押し出せし時、すでに費ひ果して今日までの日用雜費さへ、よくも續きしと思ふほどの今更、また衣類は世間なみくの輕き嫁入沙汰よりも多く持てども、その衣類は葛籠の數といひ底も重けに一枚も失はざる體、さては川上夫婦の外に金の出どころなしと十中の八九まで覘ひは定まりながら、二度の失敗を重ねて言句もなき折柄、それかと斬り込んで問ふべき勇氣もなく、また不意に川上夫婦を襲うて詰らむと



すれば、最初の一言に恥ぢ再び訪はぬといひし誓約に恥ぢて、さすがの上田先生も二十貫目の大兵を締めつゝ、蹙音しのぼせ二階へ遁け上つて黒田に對ひながら、「おい困ったよ、まだ何だか御機嫌が直らないやうだぜ」「ハ、、、、あんなまり君は人が善過ぎるよ、今日で二日目だらう、その間に君、ゆうべ一夜の活動場所があるぢやアないか、いくら怒ったって女だ、いくら面目玉を踏み潰したって男だ、ね、その女が女房で其男が亭主で、一夜を越して何のこつたい、腕が無さ過ぎるぢやアないか、そかア君、夫婦の情合で、ハ、、、、何とかなりさうなもんだ、旨く誤魔化して仕舞へば宜いに」「バ、馬鹿、貴様と乃公とは」「何、違ふもンか、外の事は違つても、こればかりは君」「え、馬鹿な、ハ、、、、」「ハ、、、、さう怒るやうちやア逆も無効だぜ、當分まづ和睦がむづかしいと覺悟しなければならん、ハ、、、、」

をりしも階下よりお清の聲「ちよいと良人、用が御坐いますよ、はやく降りて来て下さい、黒田さん貴君また、何を御師範役して在らッしやるの」「そウら君、お聲がか、ッたぞ、はやく降りてくれ、いつでも僕が悪者に見られるから困るよ、何も僕が別に」「おや黒田さん、また貴君ア良人に御用談ですか」「いや何、決して、今ちよいとはやく降りるが宜からうと、しきりに勧めて居る最中です」「虚言を仰しやい、うまく誤魔化して仕舞へなぞいふ聲が聞えませんでしたよ」「や、聞えましたか、こりやア失敬、恐れ入りましたな、ハ、、、、」

外貌は鬼神を手捕にすべきほどの上田ながら、疵もつ足の笹原を歩む心地して、やうく梯子段を傳ひ降りつゝ、二十貫目の大男そつと音もなく火鉢の傍に坐せば、お清おもはず吹き出して天井を見上げながら、「良人、二階で黒田さんと何を話して在らしたの、もう五時ですよ、すぐ夜ですよ、少し早過ぎますが今日は雨も降るし今あの店を閉した音が良人がたに



聞えませなんだの』『いや何、聞えた様だがね、あの黒田と少々、しかし、む、さうかい、もう五時かい、全體、何の用だ』『別に用というて御坐いませんがね、妙なもんでせう、店を出して今日が四日目、良人が歸つてから二日目、しかも朝からの雨天で今あの通り降り出しましたらう、それに良人、一圓三十八錢七厘といふ店賣がありましたよ、ちやんと樂に平氣で坐つて居て、おまけに片手間で針仕事をして居ながら、ね、薄闇の四時間も吐鳴り歩いて只の一枚も賣れなかつた良人の辻占よりかア、よほど割合が宜くつて、面白いでせう』『恐縮、縮、どうも、はや、何とも申譯が、ねエおい、乃公は何故こんな間拔けてるだらう、あ、いけない、逆も無効だ、天生の馬鹿だな此奴ア』『ホ、、、、少しは氣が付きましかね、うき世を渡る道はまた格別といふ事』『ついた、氣が付いたどころか、皮を破り肉に喰ひ込み骨に刻んで腸に染み渡つたよ』『ですから以來、良人ア何もなさらないで、じつとして

在らつしやいよ、過日もいふ通り男は男で、こゝといふ男の活動場所が、また外にもありませんからね』『一言なし、閉口々々、しかし和女、よくまア斯う急に出來たもんだな、實に驚いたぜ、ふいと何心なく歸つて來た時にやア』『ホ、、、、こゝが浮世の綱渡りといふもんですから、しばらく羽織きて見物なさい』『なるほど、だが和女、どうして』『さう良人のやうに、こんな小さな事を、いちく』『ちやア聞かない、きかない、たゞ見物して有難く思つてゐるがね、ハ、、、、わからないなア世の中の俗事は』『その分らない俗事が良人、女の小股走りといふもんですよ、立派に分りきつた人に感心さすのは男の本藝、ね、よろしいか』『む、しかし妙だ』『ホ、、、、その妙な中から今夜ア、ちよいと御馳走してあげませう、あの黒田さんも呼び下してね、ついでに黒田さんへ言つてあける事が御坐いますわ』『いやもう大抵なら許してやれ、さすがの彼奴も和女には舌を巻いて避易してるさ』『なアに良人、



黒田さんをいぢめるンぢやアないンですよ』さうか、それなら宜いが、彼奴、何だか頼りに  
 びく／＼してゐるぜ和女の聲がすると』『ホ、ホ、聞き及ぶお島さんとやらにも、それほど氣  
 兼ねなすつた方ですかねエ黒田さんは』ところが彼奴、その時分なかくの横著野郎で、お  
 島といふ女は實に可哀さうだつたよ、しかし今まで生きて居れば、まさか、あゝまで苦勞は  
 さしをるまいて、つまり自分の大病と其お島の死んだので、前後こゝに殆ど別種の人間にな  
 ツてるからなア、あまりお島の事をいうてやるな、あれでも泣くよ、男泣きに』もし妾が、  
 そのお島さんのやうに、死にでもしたら良人どうなさいます』『え、馬鹿な、生きてるもんか  
 馬鹿なッ』

其九

女の浮世沙汰は男の大道業よりも得て勝利のあるもの、絶え間なき小雨と小商賣は自然に家  
 の潤澤となりて、溜らねど乾かぬ内證の獨笑み、ましてお清は顔こそ二の町なれ心の優しさ  
 と言葉の愛嬌に人を外さねば、いつしか客足ついて照り降りなしの日に二圓は一文も缺かさ  
 ず、其うちの煙草に一割と齒磨き楊枝の類に二割五分とすれば、七十錢の利益は店番しなが  
 ら片手間の仕立物を合はして九十錢、三九二十七圓で馴れし世帯の小器用なる三人暮しは却  
 ツて天下泰平、これ／＼と出入帳を鼻頭に突き付けられて上田先生いよく閉口頓首、悲し  
 いかな大聲は俚耳に入らず大智は小人に解せられず、あゝ俗世の俗事は俗物の俗才に限ると  
 いひしを、ぐツとお清に睨まれて、忽然すツと首を縮めぬ、  
 さてどまだ小女郎一人を置くほどの身代ならねば、三度の食事もお清みづから手を下す間の  
 店番に、ちよいと良人と上田先生をり／＼押し出されて思はず目を丸くすれば、辻占を吐鳴  
 り歩くよりは人品ですよと一本まるられて、ぎゆうの音も出でず、おい黒田貴様も降りて來



いと友を呼ぶや否、いえいけません黒田さんは加減しらすの煙草好ですといはれて、黒田おもはず二階に獨り面を膨らしながら、さて一言も得いはぬ心中、乃公が直接に盗むもんかい、うぬが亭主を欺して貰ふばかりだい、

上田と黒田と二人のみならば、芋蟲と蟻螂との冬籠り、太いも細いも何の役には立たで忽ち落城すべき筈の年の暮も、お清たゞ一人の活動に門松の翠色も世間體の餅も屠蘇も整うて、いつの間に仕立てたやら木綿なれど新しき羽織と著物、また病人には古けれど裏地に絹の柔かきを用ゐて綿さへ更に多く入れたるを差出せば、上田も黒田も互に顔を見合はせて目に涙、逆も野郎は無効だねエ、

例に依つて例の如き上田ならば洒々落落々、さらに何の仔細もなければ、あはれ今は浮世に妻

帯の身として、しかも辻占の失敗以來、何とやら我みづから我心に咎められつゝ、この三月ばかりは絶えて訪はざりしが、年たちかへる新玉の春の壽詞とて、一月の三日、始めて濱町の川上が許へ出で行きぬ、

川上夫婦かくと聞いて、かざり立てたる客室よりも心易けに奥の一室へ導きつゝ、殊更に山海の珍味を積んで左右より厚遇せば、上田なほさら恐縮の體、二や、久しく無沙汰したがね、罪も報いも去年の一切萬事は年と共に改まって零に歸すべき御年始といふ名目の下に、やうく這ひ出して面も被らず斯く推参したのさ、委細は定めし清から聞いたらうが、ハ、ハ、ハ、辻占で一敗地に塗れてより以來、當分まづ浮世といふものに對しては無能力の上田力、いやはや實に君、まるツたぜ、一言もなし、たゞ茫然として徒らに馬鹿を加へしのみさ、ねエ細君、わけて貴女にやア失敬の重疊、けしからん簪の玉なんぞを差上げて廣言を吐き散らし







と無沙汰する心算でもなかつたんですが、つい、その、ハ、、、、何だか妙に鬨が高くツ  
 て、やアこの大盃を川上、僕には、全體いくら、え、三合半の飾り盃たア驚いたな、ちよツ  
 仕方がない飲め、しかし妙さねエ、當家へ來ると上田は矢張り例に依つて例の如しだ、何故  
 だらう、忽ち俗塵の一切萬事を忘れて人間を脱却したるの心地、ハ、、、、人間を外れた  
 奴だから始末に終へない厄介物だ、ねエ細君、わけて貴女にやア久しい厄介をかけたな、  
 また今年の厄介ついでに御苦勞ながら、ついでにお酌を、なみくくと注ぎ候へ黄金の色の  
 凸とならむまで』『おや上田さん、先刻、入らした時、どうも變だと思つて實は心配して居り  
 ましたに、そろく元氣が出て來ましたことね』『なアに元氣が出て來たンぢやアない、これ  
 が元來の地です、しかし哀れむべし妻帯以來、この上田もね、をりくこの木地を隠すやう  
 な事がありますよ』『おや、どうして、どんなどころで』『ハ、、、、それを言はぬが花ぢ

やと、申すこつてすよ』

其十

一月も過ぎ二月も夢うつ、ざんざめきし浮世の春も暮れ行く四月の末より、はや五月の梢  
 に残の花ちらほらと青葉まじりの杜鵑、その初聲は聴かずとも小唄にうたふ更衣、身さへ  
 輕けの世間に引き代へて、こゝにお清は次第に身重くなりゆきつ、はや七月目の今日この  
 ごろは朝夕の起居さへ苦しげに溜息つきながら、なほ店番やら食事やら身一個に掻き集めて  
 の忙しさを見るにつけ思ふにつけて、これも我ゆゑかと今更に罪を犯せし心地、好きな酒さ  
 へ一滴も得飲まで獨り何をか思ひ煩ひぬ、

されど二階の黒田が疾病いつしか薄らぎて、もはや生命は我物、只この上は病後の養生專一  
 と請合ひし醫者の言葉に、かくとなれば身よりも心なほさら元來の張り切つたる男、勢ひに



乗じて宛ら追風に帆をあけしが如く、わづか一月ばかりのうちに朝夕めき／＼と目に立ちて癒えしかば、せめての手助けと我から進んで上田もろとも、交る／＼店番はすれども、をり／＼言葉の端に客を怒らして空しく取返し、さては代價を間違うて返しもならぬ損を招ぐ體に、お清いよく氣を揉んで寸隙もなく立働きぬ、

良人にして良人の甲斐なき我、やがて子を生めば父として父の功なき我、たゞ此身一個さへ妻の手前いと心苦しきに、あの黒田までを背負ひ込んでの苦勞をかけ、大の男が二人も居ながら何の用にも立たず、はや臨月に程もない妊婦を立働かして、こゝに寢て喰ふばかりの我等そも／＼冥加に過ぎたりと、日を逐うて次第に身重くなりし妻を見れば、こゝに我を責め來る浮世の枷かと思はれぬ、

はや店も閉ぢ夕飯も濟み果てしかば、黒田は身の運動を兼ねて醫者の許まで出で行きつゝ、

夫婦たゞ二人の差對ひに火鉢を隔て、見るともなしに妻が腹部ちらと見遣りながら、さも氣の毒けの體に眉を擧めて、『ねエおい、よほど苦しいやうだなア、随分、つらいこつたらうなア、こゝ一二個月前までは、さうも目立たなかつたが、此ごろぢやア毎日、く、見るとこゝに膨れ出して來るやうで、何だか物に追ツかけられるやうに、おれがして、第一、和女に氣の毒でならないよ』『ホ、今更ら良人、そんな事を言つたつて、出て仕舞はなきやア此ま引ッ込むもぢやアなし、追ツかけられるやうに心持がしても、まさか降ツて湧いた物でもなし、たしかに覺えのある事ですから良人、仕様がありますまいよ』『ハ、ハ、ハ、仕様がなところか、固より舞雀躍して大に仕様あらむと欲すれどもさ、かくの通りの乃公で、和女に對し、また出來る子に對しても、實ア申譯がないよ、ねエ、無能力の良人、さらに親甲斐もない、父で』『何ですよウ、つまらない、愚癡ッほい、男らしくもない、妙に良人ア此こ



ろ退けて在らッしやるよ、子寶と言ッて金や贅澤で買へない大切なものが生れる矢前、そんな退け込んだ愚癡な言ふもンぢや、御坐いませんよ、その體軀だけの元氣を出して威勢よくなさい、はきくとして下さい、子は親の勢ひで生れ妻は良人の力で安産するといふくらるですから、時に良人、もし女の子なら何といひませう、もし男なら何と名をつけませうねエ、もう八月の末、來月だけですよ、どうか暫うか起きて居て自由になるのは、十月目の臨月は女の大役、大業にいへば生死の境ですもの、よぼさら良人、しツかりして、こゝでこそ例の上田一流、まツたくですよ』『いや、和女のやうに、さう言はれると乃公も少しは心丈夫になつて、元氣も出るがね、その苦しうな身重の和女一人を働か、よぼさら、黒田といひ、大の野郎が二人まで何の役にも立たないかと思やア』『ホ、ホ、またそれ、そこが良人の感違ひですよ、世帯の事は一切、氣にかけないで在らッしやると善いに、たとひ小

さな店でも、あゝしてさへ置けば喰ふに困る筈はなしさ、來月にもなれば備ひ婆さんを置く事も、ちやんと極めてあるンですから、萬事、安心して在らッしやい、うまれる子が大切ですもの、その子に觸るまで働けと言ッても働きやアしませんさ』『む、さうか、來月になりやア備ひ婆を』『ですとも、横町の八百屋に田舎から來て厄介の婆さんを頼む筈に極めてあるンです、しかし店だけは、お嫌でせうが黒田さんと良人と、交り番にねエ』『や、承知、心得た』『いえさ、さう安請合ぢやア却ッて困ります、なるほど、過日も店番はして下さいました、あんな良人、お客を捉へて喧嘩腰になつたり、五錢の物を三錢に賣つたり、七錢の剩餘を狼狽へて十錢銀貨を出したり、あれぢやア良人、いえさ第一、お二人とも言葉が粗畧すぎ、横柄ですよ、黒田さんは、まだ世上に擦れて在らッしやるから少しは如才のないところもありますが、良人と來ちやア、ホ、ホ、まるで方なし、お客に對ッて、おい君なンざア、い



「けませんよ、ちと稽古なさらないと」『や、どうも甚だ、以て』『や、どうもぢやア御坐いま  
 せん、明日から妾と一處に店へ出て、萬事を見習つて置いて下さい、お氣の毒ですが黒田さ  
 ンにも、ねエ、かまひますまい』『何、かまふもンか、なるほど彼奴は乃公よりも横著氣があ  
 つて世辭は宜いから、奴を店番にして乃公は臺所一切を受持たうかと、前夜そつと二人で相  
 談して居つた折柄だよ』『ホ、ホ、一人で自炊などの時は兎も角、かりにも一家を構へた以上  
 は、假令どんな事があつても良人、男の手を下すもンぢやア御坐いませんよ、臺所の事は第  
 一、いくら器用にしても男は目に見えない徒費があつて、つまり不經濟になりますから』『だ  
 らうなア、なるほど、いよく持て餘しもんだね乃公は、ぢやア一意専心、謹んで明日から  
 店の方を熱心に』『それも良人、わづかの間ですから、辛抱して下さい、實は、させたくない  
 ンですが、かういふ場合で、こゝが浮世ですさ、ね、また良人の方で、もう萬事が手に入ッ

たから此ま、長く遣ると仰しやつても、妾の身が二個になつて産後の經過さへ濟めば、決し  
 て、させて置きませんから、その代り赤ん坊の保母は良人にさせますよ、よろしいか、これ  
 こそ良人が不足の言へないこつてせう、しかし、その人並すぐれた大きな體軀で、こはぐ  
 赤ん坊を抱いたり背負つたりして歩く風が嚙をかしいでせうね、ホ、ホ、はやく見たいこと  
 よ、ねエ、ホ、ホ、』『ハツハ、ハ、片言でもいふやうになつたら、どんなもんだらう、乃公  
 にでも、おとつちやんといふだらうか』『知れたこと仰しやい、他人の子ぢやア御坐いません  
 よ馬鹿な』『や、恐れ入つたな、此おとつちやん頗る閉口だ、呱呱の聲は正に上田力を』『正  
 に上田を、何ですと』『いやさ、呱呱とは赤ん坊の啼く聲で、その聲が、乃公を、あ、何だか  
 變な心持になつた、とりも直さず乃公の子だねエ、その生るゝ子は、む、驚いたな、天この  
 愚鈍漢をして子あらしむるたア、ハ、ハ、しかし可愛いだらうなア、なるべく男の子を生ン



でくれ、たのむぜ』『男か女か妾の勝手に出来ませんよ、おや、あの聲音は黒田さん、もう良人この談話は止しませうよ、ねエ、ホ、、、』『ハ、、、』

人に過ぎたる機才はあれど所謂の横才屈折とて、その才は横に曲つて世間の調子外れに飛び出したる黒田健次、また人に過ぎたる高潔の風はあれど天真爛漫の度を越え過ぎて、その高潔は寧ろ當世の有無圓轉に叶はざる上田力、これに浮世の羽翼といふべき金を持たせて生涯さらに顧慮の念なからしめば、天晴れ揃ひも揃うて一流の男ながら、生憎金がなく運がなく他人に使はるゝを嫌ひ身の切賣を厭へば、あはれ路次裏の泥溝板たゝいて渡る一文奴にも劣りて手も出でず足も出でず、萬事すること爲す事いちく闇の夜の鐵砲玉、音ばかり高く響いて行方も知れぬ的外れに、今は我から身を縮めて一本の梢に冬籠る眼白の如く顔を見合

はせつゝ、二間まぐちの小賣店に天下丸呑の面を揃へてお清に吐られながら、さア黒田さん五錢の煙草これですよ有難うと言つて丁寧にお渡しなさい、あれ良人まア何のこつてすよウ、その大きな體軀で突き當つちやア店が潰れますと睨まれて、二人の大の男うろく狼狽へながら、恐縮、恐縮、

かねて頼み置きし横町の八百屋より五十あまりの婆も來りて、やうく馴れたる店の事は黒田と二人かはるゝに持ち切りしが、かくても氣にかゝりてや滾るゝばかり重き身に店と臺所を差覗いて目を配りしお清も、きのふ今日は寢床を敷かせて打臥したる體、はや産聲の聞ゆる心地して上田先生さらに何事も手につかず、うろくとして狼狽へ、おろくとして立騒ぎしが、ころしも六月三日の夜も更け渡りし一時過刻、お清しきりに呻く聲を聞き付けて



臺所の婆すでに釜の下を焚きかゝれば、上田力、宛ら百萬の軍勢に押し寄せられし勇士の如く、がばと跳ね起きて二階へ駆け上りつゝ、『おい黒田々々、さア起きてくれ、デ、出来るやうだ、起きろ〜』聲は潜むれども手は強く夜著を剥いだまゝ、またもや梯子段を駆け降りむとして大兵の忍び足、おもはず踏み込らしつゝ、どツと顛び落ちて腰骨したゝか打ちながら痛いともいはず、其まゝ、むくりと起ち上つて庭に飛び下り門の戸を引き開くるや否、かねて聞き覚え見届け置いたる産婆の許へ闇を冒し大地を響かして疾風の如く駆け出しぬ、  
 こゝ、一生の大事と七町の間を韋駄天走りに宙を飛んで、産婆の門口を割るゝばかりに打叩きながら、『来てくれ、来てくれ煙草屋の上田ぢや、えッ、ぐづぐづすると戸を叩き割るぞ、家でも何でも踏み潰すぞ、来てくれ、来てくれ』  
 さすがの産婆も慌て、起き出でつゝ、寢惚眼に門の戸を引き開けながら、おや闇いこと提灯

と吠いて内へ引き返さむとするを、この糞婆め何を吐すと叫ぶや否、元來の大力、ぬツと猿臂を伸ばして、横抱きに引ッ抱へたるまゝ、またもや闇を冒して驚き叫ぶも構はず一散に駆け出せば、をりしも夜警の巡查、はツと怪しみて横町より飛び出しつゝ、こゝら待てと躍り来る胸邊どツと片手に突き付して見返りもせず馳せ歸りつゝ、『さア連れて来た安心せい、まだか〜、やア黒田め貴様バ、馬鹿な此場合に煙草を吹かす奴があるか畜生ぶんなぐるぞ、おい婆さん乃公の用は何だ〜』  
 やがて三十分ばかりの後、高く一聲、おぎやアと聞くや否、上田おもはず兩眼より狂喜の涙ほろ〜と滾して、果は一種言ふべからざる無量の感に打たれて堪へずやありけむ、二十貫目の大男たゞ人なき片隅の暗闇に對うて、おい〜と泣き出しぬ、



うまれしは玉の如き男兒、母のお清が家鴨に似ず、父の上田が達磨に似ず、紅を注ぎし如きは臙て色白の天生、まだ整はぬ目鼻さへ口元さへ天晴れ美男の相を備へて、しかも體格は兩親の丈夫さをうけつぎ、世間なみくよりは大きく肥え太りたる體、あはれ此まゝ何の支障もなく行末めでたく彌ましに榮え行きて、成長の後は無用の鈍物たる父の愚に倣ふなとて、その名を銳明とぞ名けぬ、

幸ひにして母のお清も産後の經過こゝに早く立ち、子は猶更ら蟲氣もなく、すやくと睡りて一點の邪氣もなく神の如き體を、父の上田は前後左右より差覗き差窺うて、たゞ頻りに満面の笑を漏らすのみ、そりやア良人の子ですよといはれて今更に容を改め、そつと抱いて御覽といはれても先生なかく、恐れて抱き得ず、もし黒田が二階の昇り降りには足音あらく聞ゆ

れば、忽然その後より追ひ上つて物をも言はず胸倉ぐつと引つ掴む勢ひ、臺所の備ひ婆が何心なく音させても、兩眼くわつと見開いて聲も出さず睨みつけぬ、

生るゝまでは世の諺、子は三界の首枷、さては我いよく、浮世の深水に落ち入るか、宛ら敵に近寄る如く恐れしかど、さて生れし後は萬事さらりと打忘れて眼前の驚喜に手の舞ひ足の踏み處を外しつゝ、をりく庭前に顛け出すほどの上田力、今は川といふ字に寝る小唄より大男の身も軽く立騒ぐ體、いかにも呵しければ、お清おもはず吹き出しながら、「さう良人のやうに朝から晩まで、まごくして居ちや、却つて赤ん坊が驚きますから、せめて一日、何處かで氣を落ち付けて在らつしやい、幸ひ濱町で早速良人あゝいふ立派な祝儀を貰つたぎり、まだ其まゝお禮にも行かないでせう、けふは日曜だし、きつと御在宅ですよ、ねエ良人」



「さう和女、乃公を邪魔にしなくとも宜いちやアないか、おとなしく静肅にするから、此まゝにして置いてくれ、どうして一日も家外に出て居られるかい、馬鹿な、乃公の子だアね」  
「ホ、ホ、良人の子は分ッてますさ、しかし其子の御禮ですから、うッちやツても置かれ  
ますまい、ね」  
「ちやア仕方がない、ちよいと往ッて来よう、すぐ歸るよ、なるべく大切に  
て萬事に氣を付けて、第一あの黒田め、病氣あがりの瘦セツ法師の癖に、どうも嫌に聲音の  
荒い奴だ」  
「なアに黒田さんより良人の方が却ッて酷いことよ、いくら身を軽くして音はさせ  
ないでも、づしり／＼と床板に響き渡りますもの、まるで小さな地震ですわ」  
「ハ、ハ、ハ、ち  
やア兎も角、往ッて来るから、氣を付けろよ」  
「この上に氣の付けやうがありますものか」  
「いやさ、咳でも大きな咳をすると言ふこッた、もし驚かして蟲氣でも出したら和女どう  
する、乃公の子だぞ、ちよいと覗いて行かう、いや、よく寝て居るわい、古今名筆の畫と雖

も更に及ばない赤ん坊の寝顔、神聖にして犯すべからずたア眞に、これだよ、乾坤を巻き落  
さむとする賢哲の千萬言も、あはれこの嬰兒が無言に如かず、三軍を叱咤する英雄の憤怒も  
河童の屁だ、いづこに對うて發すべきや咄、あゝ汝あるが爲に上田力こゝに死も辭せず、あ  
ゝ汝あるがために上田力この後の浮世に水火の苦を甘んじて笑はむ、ねエおい、乃公が斯う  
言ッてる事が夢にでも通じるだらうか、おとッちやんが今や將に出て行かむとするのを知ッ  
てるだらうか、おや何だか目を動かして口元を、もが／＼さすぜ、腹が空ツたかも知れない、  
乳を遣れ、おい遣れといふに、和女だッて三度の食事はするだらう、おい遣らないか乳を」  
「ホ、ホ、何ですよ、騒々しい、今しがた乳を遣りましたから、さうして良人、すやす  
やと心持よく寝てるんですよ」  
「いや、ともかくも乃公の見る前で、やツてくれ、どうも不  
安心だ、こりやア、乃公の子だぞ、大切な一人子だ、そも／＼妻といへど元來は他人の寄合、



ある條件と人間一般の作用に依つて異性を合したもんだ、たゞそれ子なるものに至つては、この乃公が肉を與へ血を分ち性を割いて茲に分身一塊の形を現せしもの、天下たゞこの銳明あるのみだ、龜末にしてくれちやア困るぜ』『ホ、ホ、赤ん坊が出来てから妾まで急に他人扱ひですか、あらまア酷いこと、この上また出来たら踏み殺されるかも知れませぬね』『なアに、さう言ふ意味ぢやアないが、およそ子といふものは』『わかりました、わかりましたよ、ぐづぐづ仰しやらずに早く往つて在らっしゃい』『往くさ、行くよ、行くから不在中わけて大事にかけるんだぞ、みだりに黒田や臺所の婆さんに觸らすことならんぞ、宜いか、さて銳明、これから汝の父は濱町の川上といふ家まで往つてくるよ、ハ、ハ、ハ、ハ、』

五尺八寸二十貫目の山の如き大男が、毬栗頭に手拭を巻き付けて玩具の花車を挿みながら、

當歳の嬰兒を脊に負うて石臼に等しき腰骨を振りつゝ、こはく冬ふゆの淺瀬あさせを渡る鷺さぎの風情ふうせいにて、達磨だるまに似たる面の相さうを崩し梟ふくろに似たる眞丸まゐまるの大目玉おほめだまを細め、朝夕あさゆふの軒端のきばに破鐘やぶかねの大音おほねを潜ひそめながら、ねんねんよウ、ねんねんころり、ねんねしなア、



倉橋幸藏

無情の草木さへ風土によりて多少の變化あれば、まして有情の人間なほさら時と境によりて其性をうつし其質をうつすの習慣、されど梅櫻桃李おのゝ根を替へて枝葉を變ぜざるかぎりには、人また善惡邪正の天生を變へて今昔その腸を黑白に變ずべき筈なし、

されば満都の風物に反いて年が年中の空腹を抱へながら一團の抱負に腹便々たりし汐入村の昔、いづれも浮世の織子めいたる同志相集りて隅田川の片邊りに難行苦學せし當時、寒夜一穗の燈下おのゝ瘦せたる膝小僧を抱きつゝ會釋もなく無遠慮に互の人物評を試みしことあり、おもへば夏の夜の藪蚊に責められて半泣きの澁面より作りいだせし吊板の飛び乗り、さては反故張の紙帳に等しき一場の懷舊談なれど、宿昔青雲の志と共にまる赤裸の五體を薄

欠



# 欠

なりぬ、

されど昔ながらの草木なほ枯れ果てねば、何となく世上の風塵を上野の森に遮りて、どこやらに残る閑靜の心地、しかもその大廈高樓が猶いまだ蠶食せざる上根岸の奥に、もとは輪王寺の宮に仕へし茶坊主の後家が、女宗匠で住みし跡なりといふ一構へ、家は狭けれど數寄風流を極めて萱葺屋根の土廂ふかく、庭も廣からねど年經し樹立に寂びて捨石に苔蒸したる體、なるほど喧嘩雜沓を避けて此地に住めば斯る家こそと思へども、四通八達の巷に隠居某と筆太の表札を掲げし愚物のある世の中、根岸といふ名を自用車かへし當世紳士の町名と心得たる徒輩の目には、出入の不便と往來の淋しきと盜賊の用心を缺點にして久しく取残したる拾ひものゝ空家、これ幸ひと飛び込んで舊のまゝなる門の柱の曲みしを縦に立直せしのみ、幾年の雨風に曝されし古木の柱に中譯ばかりの小さき名刺を張りて、それさへ今は白き



紙質を失ひつゝ、臙に薄黒く、さても聊か心憎し、何者の住宅と思へば、やう／＼眼を定めて読み得る五號活字は「倉橋幸藏」

思へば過ぎし旅路の草枕、さらぬも赤貧洗ふが如き汐入村に膝小僧抱き寝の昔、かの川上三吉が飄然都門を去つて故郷の山に歸りし其後にて、我いまだ我筆を信じて名を賣るにあらねど奈何せむ流るゝ歲月この茅屋を促して飛ぶが如き春秋しきりに讀書の窓を叩きつゝ、苦學十年の身も流石に浮世の秋は悲しく衣や薄き夜や寒き霜の朝の肌も包まで、こゝに空しく三人が瘦せたる骨の哀れさよ、いざ然らば我一人まつ初志の半を割いて衣食の犠牲となり、残る二人の同志を抱いて徐ろに此境涯を這ひ出でむのみと、多年深く藏して何事にも後陣に控へたる身が俄に案を拍つて先頭に立ちつゝ、「菩薩心夜叉手」の匿名をもて朝夕新聞に寄せし

「居家處世」の論文は、半月の長きに互りて忽ち満都を驚かし、其まゝ厚く迎へられむとせしが、これ固より名をなし家を作るがためにあらず、たゞ我々の勞働に代ふるのみ饑餓を防ぐのみと、固く辭して一個月わづかに二十五圓の客員となりつゝ、なほ二年の苦學を積んで後、いざや社會に出づべき時節到來の首途ごと、おの／＼汐入村を捨て、四方に分るゝ時、あらためて朝夕新聞社の論説記者に聘せられ、曲學こゝに筆を弄して礎盤の異なれる洋癖者流に阿らず、翻弄こゝに筆を枉けて屍となれる頑冥保守の俗論に與みせず、縦横不羈、翺翔自在、別に一個の見識と緻密の觀察とを加へて一道稜層の斷案ありとまで稱せられしが、當時の新聞社會に嫌焉たるどころありとて筆を投ぜしまゝ去つて本郷の下宿屋に身を横たへしこと半歳、たま／＼故郷出身の一大臣に知己を得て官海に擧げられ、しかも一躍その高等官中に若手の手腕家として頻りに前途の聲望を喧傳せられしが、居ること纔に三年半、何をか



俄に感ずるところありけむ、我は竟に今日の吏臭を帯びて長く官に止ること能はずと、またもや袖を拂うて職を辭せしよりこゝに三月目となりぬ、  
 そもく新聞記者は汐入村に苦學難行せし頃より其沈黙の口を漏れて屢々語りしところ、しかも一朝その望むところの論説家として一時あれほど噴々たりし名を得ながら、俄に去つて忘れたるが如く、また官吏は初志にあらず其本意にあらずといへども、慎重の態度と周到の天性をもて時の一大臣が知己を得たるのみか、前途有望なる高等官中の若手に數へられて一躍あれほどの地位を得ながら、また俄に去つて忘れたるが如く、たゞ平然として舊の一生に立歸りし倉橋幸藏こゝに三十六、さても此後の身を如何に處せむとする、

二年間、新聞社に聘せられし時、すでに一家をなすに足るべきほどの報酬を得しかど、憐れ

むべし三度の食にも事を缺いて苦學十年の曉、されば久しく飢ゑたりし腹よりも先づ書籍を求むるに急なりとて、なほ其まゝ芝の愛宕下に下宿屋住居をせしが、さて官吏となりし後は我いまだ一介の書生をもて心とすれど人さらに許さぬのみか、しかも我を擧げし郷里出身の大員が二十餘年の昔こゝに住みし記念の舊跡とて、今なほ其所有に屬せる下根岸の家を殊更に貸し與へられたるは殆ど破格の恩恵ぞと、同輩いづれも前途の吉兆を祝うて羨まれし冠木門に三年半の有難迷惑を送りぬ、

されど一朝こゝに官を捨てし倉橋幸藏、いはゞ無理往生に勧められて抱へし自用俸も車夫に呉れて追ひ出し、止むを得ざる必要上に迫られて召使ひし奴婢も一時に解備し、義理半分に強ひて住みし家は固より第一に明け渡しつゝ、三年半の間いつしか時と場合に應じて知らず識らず買ひ集めたる器具調度の類は惜し氣もなく悉く二束三文に賣り飛ばして、たゞ山の如



く貯へたる書籍と寒暑に相應の夜具と四季を凌ぐに足るべき衣服と當坐に差問なき廚の道具と、生きたるものは歸るに家なき飯炊婆一人を伴うて、わざと草深き不便の上根岸に微笑を含んで引き移りしかば、今まで椅子を並べし同輩いよくこゝに眉を擧めて倉橋幸藏が此後の身を怪しみながら、彼奴いかに何をするかと果は互に物を賭けての二問題とぞなりぬ、まして五人男のうちなる川上黒田上田の輩は頻りに小首を捻つて訝れども、倉橋が官を辭し家を移すや否、一片の端書に鉛筆の走り書きを送りていふ、

新聞記者となりて其任に堪ふる能はず、官吏となりて其職に堪ふる能はず、前後こゝに六年の春秋を空しうして何の爲すところなく、餘すところの五體また舊の一寒生となり了んぬ、あゝ夢は頻りに枕頭をめぐる隅田川の邊り汐入村に歸らむか、苦學十年の跡いたづらに露となりて舊慮の影なく友の影なきを奈何せむ、只その昔を今にうつしてこゝ

に一の茅屋を構へしのみ、乞ふ三月の後に來つて懷舊談の一場とせよ、

其二

その身を守る謹直にして事々物々に周到緻密の性を備ふれば、行つて後に悔ゆべきこと少く、その人に對しては沈黙廉潔にして更に無用の圭角を持せざれば争うて憤怒を發すべき筈なくしかも堪忍力と勉強力とは十餘年來我黨隨一の男たる倉橋幸藏が、殆ど輕舉に似たる突然その官を抛つて事こゝに出でしは決して一朝一夕の故にあらざるべく、必ず其間に何等か深き仔細あるべしと思はるゝのみか、三月の後にあらざれば來り訪ふべからずとの文意、さては例の慎重なる彼が態度、いよくその三個月をもて新に一身の方向を定めむとの心なるべし、されば我々また明りに輕々しく足を翻して其門を驚かすべからず、たゞ靜に彼が用意の整ふを待つて其意を叩くべしと、宛ら春に誘はれし處女の婚儀を待ち詫がる心地して頻りに